



TOKYO FULBRIGHT ASSOCIATION
東京フルブライト・アソシエーション

NEWSLETTER

No. 25
December
2012

各界でご活躍の輝いた方々を顕彰する同窓会の責任者と 教育交流振興財団) 設立に
して、その任務も遂行させていただきます。ご寄付やご賛助金(お名前や住所)を添付していただき
びますとともに、その寄付や賛助に身の内を込めてお寄せください。同窓会基金は、フルブ
ライト奨学金(フルブライト奨学金)の提供に活用させていただきます。





日米フルブライト交流プログラム60周年 JAPAN-U.S. FULBRIGHT PROGRAM 60th ANNIVERSARY



日米フルブライト交流プログラムが60周年を迎え、2012年5月25日には帝国ホテルで天皇皇后両陛下のご臨席を賜ってレセプションが開かれた。ルース米国駐日大使の挨拶、佐々江外務省事務次官の首頭で乾杯。弦楽四重奏、フルートのBGMの生演奏の中で懇談となり、両陛下とも親しくお話をされた。ご退場になる両陛下を拍手でお見送りした後は、ハリエット・フルブライト夫人などからの挨拶があり、午後8時、2時間半に及び会を終えた。



翌5月26日は公開シンポジウムが津田ホールで300人以上の聴衆を迎えて開かれた。2010年度ノーベル化学賞受賞者の根岸英一氏の基調講演で幕を開け、三部にわたるパネル・ディスカッション。高校生から77歳までのパネラーが、世代を越えてさまざまな問題点について発言した。午前、午後にもわたるシンポジウムの詳細は本文4〜7頁をご覧ください。



日米フルブライト交流プログラム 60周年 記念事業の報告

原田 敬美
(1974 Rice U.)
60周年記念事業実行委員長



2012年(平成24年)5月25日(金)夜、天皇皇后両陛下をお迎えし、日米フルブライト交流プログラム60周年記念レセプションを帝国ホテル、孔雀の間で開催した。また、翌日26日(土)午前から夕方まで終日記念シンポジウムを津田ホールで開催した。多くの方のご協力、ご参加を得て、楽しく、賑やかに運ぶことができた。

今年60周年を迎えた日米フルブライト交流プログラムにより、フルブライト留学生(教授、研究員含む)は、日本人約6300名、米国人約2500名に上っている。その多くが日米両国において、教育、法曹、行政、ビジネス、ジャーナリズム等の様々な分野で活躍しており、戦後の日本の経済発展に貢献し、日米関係の良好な発展に大きな役割を果たした。

今回の記念事業の目的は、第二次世界大戦後、故フルブライト上院議員が提唱した交流プログラムに感謝し、制度発足60周年をお祝いし、今後のさらなる発展を確認することである。今後益々グローバル化が加速される国際環境で、フルブライト交流プログラムの役割はさらに重要となる。

記念事業は、記念レセプションと記念シンポジウムの2つの内容から成る。

まず、第一日目の記念レセプションは第一部と第二部から構成されている。

第一部では、ご来賓、同窓生とその関係者等311名が参加し、天皇皇后両陛下をお迎えし、ジョン・ルース大使(日米教育委員会共同名誉議長)のご挨拶、佐々江賢一郎外務次官(日米教育委員会名誉議長)の乾杯の発声で、レセプションが始まった。

天皇皇后両陛下がレセプション会場に入場されると、一斉に大きな歓迎の拍手が湧き上がり、両陛下は同窓生一人一人にこやかに会釈をされながら会場正面に進まれた。

レセプションの間、天皇皇后両陛下の周りに多くの同窓生が集まり、留学時代の思い出話などし、両陛下は温かく耳を傾けられ、共感のお言葉、励ましのお言葉があった。また、翌日のシンポジウムにパネラーとして出席予定の大学生菊地将大君と高校生の松村知さんが皇后陛下とお話をされた際、菊地将大君が岩手県陸前高田市の出身で、昨年

の災害でご両親を亡くしたことをお話しすると、陛下は温かいお言葉を掛けられたようである。

ご退席の際も、大きな拍手の中、両陛下は一人一人に温かく会釈をされながら会場をご退席された。会場を出られた後、ご案内役を務める私が両陛下に行幸啓の御礼を申し上げたところ、天皇陛下から、今後益々フルブライト交流の発展をお祈りします、皇后陛下からは、本日は大変楽しゅうございましたと、フルブライト交流プログラムとフルブライターに対し、温かい激励のお言葉を賜った。

レセプションの第二部では、ヒラリー・クリントン米国防務長官から祝辞のご披露、ご来賓のハリエット・フルブライト夫人のご挨拶を頂いた。同窓生と関係者がフルブライト留学の楽しい話題に花を咲かせ、懇談した。参加者の中に元JUSEC事務局長キャロライン・ヤンさん、前事務局長のサムエル・シェパードさん等多くの懐かしい顔ぶれがあった。

5月26日付産経新聞の「天皇、皇后両陛下のご動静」によると、25日午後ご執務の後、日米フルブライト交流プログラムご臨席、その後、シンガポールのリー・クワンユー前首相とのご夕食と記載されていた。その直前の週はロンドンで英国エリザベス女王陛下の即位60周年の祝賀行事が開催され、天皇皇后両陛下は、5月18日女王陛下ご夫妻主催の昼食会にご出席された。レセプションご臨席の後の27日は、国家行事である植樹祭が開催される山口県山口市を訪問されるというご多忙な日程であった。

さらには2月に心臓の外科手術を受けられた。無事手術が終わり、ご健康でご公務をされているとはいえ、気を配りながらお仕事をされるべき術後の回復期でもあった。そうした過密なご公務の中で、わざわざフルブライト記念行事にご臨席賜り、温かいお気持ちでフルブライト留学生と会って頂き、激励頂いたことは、大変名誉である。

シンポジウムは、基調講演をしていただいた根岸英一先生はじめ、各セッションの出演者の皆様のおかげで成功裡に運ぶことができた。また、津田塾大学のご好意で会場を提供いただいたほか、ユナイテッド航空株式会社には協賛をいただいた。

記念事業遂行のため、1年半前から実行委員会を組織した。フルブライト同窓会、日米教育交流振興財団、日米教育委員会が三位一体となり、約20名の方に実行委員に就任いただいた。10回の会議と記念事業終了後の評価目的の会議1回、合計11回の実行委員会を開催した。私は当時の同窓会会長である佐藤ギン子さんから指名を受け、微力ながら実行委員長の大役を仰せつかった。無事、成功裡に運べたのは、実行委員の皆様と支えていただいた関係者の皆様のおかげである。

フルブライト交流事業に感謝、実行委員の皆様へ感謝、ご出席いただいた同窓生、関係者に感謝、記念レセプションが円滑に運ぶために裏方でご尽力いただいた警察消防、ホテルなど会場関係者に感謝。また、元会長佐藤ギン子さん、10年前の50周年記念の実行委員長賀来景英氏から助言を頂いた。

今回の体験や記録を活かし、次の周年事業にタスキをつないで行かれることを祈っております。

早川 与志子
(1985 Harvard U.)
シンポジウム実行委員長



「公開シンポジウム」委員会の委員長を務めた立場から、ご報告申し上げます。日米フルブライト交流プログラム60周年記念の公開シンポジウムは、レセプションが行われた翌日の5月26日(土)、津田塾大学千駄ヶ谷キャンパスの津田ホールで午前9時45分から午後5時30分まで行われました。

日米教育委員会委員長・加藤重治氏(文部科学省国際統括官)と共同委員のマーク・ディビッドソン氏(駐日アメリカ大使館広報文化交流担当公使)からのご挨拶の後、第一部の基調講演が始まりました。

■シンポジウムの目的と構成■

シンポジウム委員会の準備が動き出したのは、東日本大震災の前でした。レセプションは主にフルブライター同窓生と関係者たちの懇親が目的でしたが、公開シンポジウムは広く日米フルブライト交流プログラムについて理解を深めていただき、未来に向かって有意義なメッセージを伝えることが目的です。とにかくフルブライトらしい「知的」で「文化的」で「歴史を踏まえた」内容にしようと考えました。日本ではとくに若者が内向きになって、留学などの異文化交流に目が向かなくなっている。欧米では経済危機が進行している。だから、シンポジウムの目的を、①世界の未来に向けてのメッセージの発信、②フルブライト体験で日本・日本人はどんな貢献をしてきたかを知ってもらう、③70周年以降を視野に入れて活性化させよう、という三つに絞りました。そこで「3・11」が起きました。復興の過程で、日本は世界から温かい大きな支援を受けて、「世界は一つ」になれたと感じました。未来を見据えた思考の重要性がますます高まったのです。

そこで、シンポジウムの総タイトルを「あしたを拓く」としました。いまわれわれはこれまでとは質的にも規模も異なる困難に向かっている。それをどう乗り越えるか、未来をどう切り拓くか、それを考えようということで、全体を4部構成にしました。第一部は根岸英一先生による基

調講演。第二部の「若者は発言する。あなたはどうか答える？」はジェネレーション・ギャップを乗り越える試みにしたい。第三部の「女性たちは世界へはばたく」は、元気な女性たちに登場してもらいました。第四部「私のアメリカ、私の日本～交流60年の歴史とこれからの日米関係を考える」は、それぞれの留学・交流体験から、多国間交流の現実と発展の可能性を考えるものでした。

そして、第一部と第二部の間に、5分間ですが、仙台在住の写真家・宍戸清孝氏とアシスタント菅井理恵さんがずっと記録した写真で構成したフォト・エッセイ「つなぐ力『3・11』から未来へ」をスクリーン上で見ていただきました。

■第一部 基調講演「未来へのメッセージ～フルブライト留学からノーベル賞受賞、そして、いま～」■

2010年ノーベル化学賞を受賞された根岸英一先生は、1960年にフルブライト奨学生としてペンシルベニア大学に留学なさいました。先生によると、ノーベル賞を受賞する確率は10の7乗(10,000,000)分の1だそうで、世界の研究者たちはその高く険しい崖の頂点を目指して崖登り競争をしているようなものなのだそうです。フルブライト体験はその崖登りの足がかりになったとのこと。頂点に立たれたいま、後進の指導に邁進しておられます。

■第二部 「若者は発言する。あなたはどうか答える？」■

ここでは若者のパネリストをどう選ぶかに苦勞しました。新聞で菊地将大くんという高校生の被災者が、「高校生平和大使」としてスイスの国連欧州本部を訪れ、自己の体験を語るとともに、支援への感謝と復興への決意をスピーチしたという記事を見て、岩手県立高田高校に会いに行きました。菊地くんは津波で両親を失い、祖母と暮らしていましたが、物静かで非常に好感を得ました。4月から筑波大学に進学しています。

もう一人の松村知さんは甲府市立北東中学校の三年生でした。やはり新聞で2011年度朝日新聞社主催「ニッポン前へ委員会」提言論文『論文では、ないけれど』で特別賞を受賞したという記事で知りました。ごく普通の中学生で、被災者ではないのですが、「3・11」を一生懸命考えている姿勢が分かりました。いま県立甲府西高校生です。

マイケル・クシェルさんは25歳ですが、カリフォルニア大学パークレー校を卒業し、2010年フルブライト奨学生として愛知県立大学に留学。地方に根付く「地芝居」を研究した後、横浜にあるアメリカ・カナダ大学連合日本研究センターで日本語と地芝居について引き続き学んでいます。また、オトナの立場から根岸英一先生、開会挨拶をされた在日米大使館のマーク・J・ディビッドソン公使、さらに進行役として学習院女子大学学長・石澤靖治氏(1988年度フルブライター)にご登場いただきました。

最初に菊地くんが自身の被災体験と復興への希望を、松村さんは中学生が震災復興にできるのは何かと考えたことを語り、クシェルさんは地芝居のフィールドワークを通して地方の日本人と交流したこと、役者体験、そして震災について述べました。ディビッドソン氏は、若者は日本の将来にもっと楽観的になってほしい、女性にもっと機会を与

(7頁につづく)



えるべし、と発言。根岸先生はボトム・アップも必要だが、いまはむしろトップ・プルアップが重要なのでは、と提案されました。石澤氏がまとめとして、1995年の阪神淡路大震災と2011年東日本大震災で日本が世界からどう見られたかを比較。停滞している日本の現状に、もっと感動をと激励する一方で、アメリカにもっと魅力的な国になってほしいと要望されました。

■第三部 「女性たちは世界にはばたく」■

午後に入って、パネリストは飯野正子さん（津田塾大学学長 1966年度フルブライター）、木下真里さん（元国連難民高等弁務官事務所公衆衛生オフィサー・現ミャンマー在住 2007年度フルブライター）、黒田由貴子さん（ピープルフォーカス・コンサルティング ファウンダー取締役 1989年度フルブライター）、藍原寛子さん（フリーランス・ライター 福島市在住 2005年度フルブライター）。そして進行は日本テレビ解説委員の小栗泉さん（2007年度フルブライター）にお願いしました。

飯野さんはこのシンポジウムの会場として津田ホールを格安で提供してくださいました。スピーチでは創立者・津田梅子の留学とご自身の留学とをからめてお話しされました。木下さんはミャンマーでNGO職員として勤務しながらミャンマー人の夫とともに郊外の診療所運営に従事されている経験から、紛争災害時の保健衛生の問題を語られました。黒田さんはソニーなどの企業で勤務した後、現在の会社を起業。企業コンサルタント業を始めたとき、アメリカ人の友人から、「コングラチュレーションズ！」と祝福されたことを述べ、女性には失うものがない利点を強調されました。藍原さんは元福島民友記者からフリーになって東京に越してきたとたんに大震災が起り、再び福島県に戻って震災報道を続けておられます。アメリカで臓器移植の現場取材し、女医が多いことに驚いたそうです。

最後に小栗さんから、次代の女性たちへの言葉を求められ、藍原さん「人生は短い。決断を早く！」、黒田さん「これからは公益資本主義の時代。NPOを通して世界に貢献を」、木下さん「幸せの定義は？ 目標に近づく幸せがある。目標を持つべし」、飯野さん「若い人を支える仕組みを。若い人を信じよう」と述べられました。

■第四部 「私のアメリカ、私の日本～交流60年の歴史とこれからの日米関係を考える」■

パネリストに西崎文子さん（東京大学教授 1985年度フルブライター）、ブルース・アロンソン氏（クレイトン大学教授 2000年度および2011年度フルブライター）、フレデリック・ディキンソン氏（ペンシルベニア大学准教授 1989年度フルブライター）、そして三浦俊章氏（朝日新聞論説委員）に進行役をお願いしました。

三浦氏は日米学生会議でアメリカ学生と共同生活をしたこと、ハーバード大学での研究などを通して、人的交流は本当に危機なのかと問題提起し、アメリカの大学ではアジア人同士がアジアのことをディスカッションしているのに、なぜ日本では同じ議論がなされないのかを問いました。

西崎さんは国家間同盟ではなく、個人にとってのアメリカ

カ・日本から発想し、自身の留学体験から日米関係の変化、多様化を語りました。専門のアメリカ外交史研究は日本だけでなくイギリスでも低調で、アメリカの相対化が進み、アジア-アメリカ-日本の関係が多様化してきていることを強調されました。

アロンソン氏はコーポレート・ガバナンスと法曹の比較研究がご専門ですが、二度のフルブライト留学（現在は早稲田大学で研究中）の間に日本がいかに変わったかを実感されたそうです。アメリカよりアジア諸国との交流が盛んになり、アメリカ在住の日本企業でもかつては社員が日本の本社を向いていたが、いまはグローバルな発想になってきていると。まだ女性パワーの活用には成功していないが、景気がよくなれば政治も日米関係も好転する。「ガンバリマシヨ！」と激励されました。

ディキンソン氏は近代日本政治史・外交史、二十世紀世界史がご専門で、現在客員外国人研究員として国際日本文化研究センターに在籍しておられます。「ジャパン・アズ・ナンバーワン」の時代は日本の経営・経済を学べ、という傾向でしたが、いまはアニメから日本に興味を持ったアジア人がアメリカの大学に日本を学びに来るそうです。フルブライト・プログラムも日米二国間ではなく、多国間交流を目指すべし。「スモウ界も多国籍化してますから」と相撲ファンらしいお話でした。

■最後に、反省点など■

無事、すべてのスケジュールが終わり、最後に60周年記念行事の実行委員長である原田敬美氏から「五つの感謝」という締めがありました。「出席者・参加者に感謝」「パネリスト、とくに根岸先生と若いお二人に感謝」「ハリエット・フルブライト夫人に感謝」「ご協力いただいた津田塾大学とユナイテッド航空に感謝」「シンポジウム実行委員会の一年半の努力に感謝」。

そして、「二つのお願い」——「フルブライト活動のサポーターになってください」「周囲の若者たちに、『フルブライトにチャレンジせよ』とってください」。

かくして、シンポジウムは終了しました。今後、70周年以降への参考として、反省点を三つ挙げておきます。

- ① 役割を明確にする。60周年記念事業実行委員会はJUSEC、TFA、実行委員会で構成されていましたが、それぞれの役割が曖昧な部分もあり、やりにくいことがありました。各組織の役割を分担化し、より効率的な連携をすることが大事だと思います。
- ② 予算の問題。50周年のときより予算が少ないのは仕方ありませんが、必要経費は必ずあります。例えば、われわれはボランティアでいいのですけれど、フルブライターでない方が協力してくれた場合は考慮すべきでしょう。その辺のことなども含め、予算の内容は最初の段階で出来るだけ明確にした方が現実的ではないでしょうか。
- ③ 実行委員会のあり方。一部の人に負担がかかりすぎます。すべての人が同じように活動するのは無理ですが、宣伝広報や参加者集めの協力など、少なくとも実行委員は自分に出来ることを具体的に考えて参加していただきたいと思っています。

ニッケル・オデオンからアカデミー賞まで ～映画にみるアメリカ～

平野共余子 (1979 New York U.)

私は1979年フルブライトプログラムで当時英語圏における映画研究の最先端であったニューヨーク大学シネマ・スタディーズ学科へ留学させていただきました。そこではアメリカ映画の歴史を文化的社会的側面から考察した古典である「映画が作ったアメリカ (Movie Made America)」(1975)の著者のロバート・スクラー先生に指導教官になっていただき、素晴らしいセミナーや授業を体験させていただきました。スクラー先生はフルブライトで東大と上智大学で教えられましたが、残念なことに昨年事故で亡くなりました。また、アメリカ人として初めてロシア革命後のソビエト連邦に赴き、セルゲイ・エイゼンSTEIN監督のもとで学び、エイゼンSTEINの映画理論の著作を英訳し、中国映画について最初の英語の本「電影 (Dianying)」(1972)も出したジェイ・レイダ先生にも、1988年に先生が亡くなるまでご指導いただきました。

ニューヨーク大学はベトナム戦争の頃から反体制運動の有名な拠点でしたが、1970年代末も南米やアフリカの第三世界の映画を専門とするロバート・スタム先生をはじめ、揺れ動く世界の政治社会の状況に敏感に取り入れていく生き生きとした研究をする先生方がいました。その一方で、伝統的保守的にアメリカ映画の歴史を見ていく先生もいました。また私はとても難しくて授業をとることができなかったのですが、当時文科系で流行していた記号学、構造主義、精神分析などを採り入れ、映画学はこんなに深遠で複雑で高級な学問なのだということを証明している先生方もいました。先生も学生も世界中から集まっていました。そして、映画を囲む文化的・社会的・政治的・経済的文脈を解き明かしていく映画学は、かくも面白く知的刺激に満ち満ちたものだということを、アメリカの映像学に関わる先生方から学びました。それを私がどの程度今の学生に伝えることができるのかと悩みながら努めているものの、まだまだ道は遠いです。

豪華な劇場で庶民の娯楽

私は1986年から2004年まで、日米文化交流を目的としたニューヨークの非営利団体ジャパン・ソサエティーの映画部門で、日本映画や日本に関する映画を上映する仕事をしていました。2004年のある日、アメリカ人の男性からお電話をいただきました。ニューヨークのダウンタウンから電車で20分ほど行ったハドソン川の向こう側のニュージャージー州のジャージー・シティという町に、ローズ・シアターという古い映画館があり、その修復のために非営利団体を作り修復はまだ完成していないが、日本映画を上映したいというご相談でした。

日本映画を上映したいというご相談は、カナダも含めて各地からよく受けていました。この時も、劇場にどのくら



い座席があるのか、どんなお客さんが来るのか、どのような映画を見せているのか、と基本情報を尋ねているうちに、私は次第にこの劇場に興味を持ち始めました。この方が「実はわが劇場は昔ムービー・パレスだったところで、とても大規模で座席は3,000、でも椅子の多くはまだ使える状態でなくて、週末にボランティアの人たちが椅子や舞台の床を修理しています」と言うのです。座席3,000というのびびっくりしましたが、ボランティアの男女が大工仕事をしている様子を想像して、手作りの劇場を復活させようとするコミュニティの人々の意欲をととてもほほえましく思いました。そしてニュージャージーのムービー・パレスを一度見たいという好奇心が沸いてきました。

ムービー・パレスというのは文字通り、宮殿のような豪華な映画館のことで、1910年代から1940年代にかけてアメリカの大都市で多く建設され、最盛期の1925年から30年頃は、毎年数百の劇場が作られていたといわれています。大規模な建築様式で、数百から、3,000の座席数を誇るものです。私は2002年にロサンゼルスに出張したとき、ジャパン・ソサエティーとお付き合いのあったアメリカン・シネマテークという映画上映非営利団体を訪ね、1922年に建てられた元ムービー・パレスの劇場に行きました。1920年代にアメリカで流行した、エキゾチックなオリエンタル趣味やエジプトへの興味を反映した建築デザインから、その劇場は「エジプシャン・シアター」と呼ばれています。中を案内されて私は息を呑みました。現在の座席は650ですが、建設された当時の壮大さがしのばれます。サイレント映画を上映していたので音楽のための巨大なパイプオルガンが舞台にあり、天井や壁もかつては金箔だったようで、豪華

絢爛です。広々としたロビー、これまた巨大な女性用トイレやパウダールームは、何もかもがアメリカの経済的豊かさを誇示したものでした。

ニュージャージーの劇場からお電話をくださった方は、話をしているうちに「一度劇場を見に来ませんか？」とおっしゃってくださったので、私は映画が上映される土曜日午後、早めに何うことにしました。劇場は電車の駅から歩いて数分で、私のように車のない庶民が1920年代から気軽に行ける足の便も備わっています。1929年に建てられた劇場に入って、まずロビーの天井の高さと空間の大きさに驚きました。3,100席という劇場内や舞台裏を案内され、かつてパイプオルガンがあった場所も残されていました。そして金箔が眩しかったに違いない1920年代の劇場の豪華な雰囲気にも圧倒されました。私がつまづいて息をついていると、どうしてこんな建物がアメリカでたくさん建てられたのか分かりますか？と聞かれました。ヨーロッパでこのような劇場は、オペラハウスかコンサートホールです。でも新天地アメリカに来た移民たちは、庶民的な娯楽芸術の映画を見ることで、この豪華な気分を味わったのです、という説明でした。

5セント硬貨で映画鑑賞

アメリカで映画の草創期1900年代から1910年代にかけて、映画を見て楽しむのは大都市の移民を主体とする労働者階級の庶民だったので、庶民でも払える額、5セントが入場料でした。5セント硬貨は「ニッケル」と呼ばれているので、映画館は「ニッケル・オデオン」と呼ばれました。オペラやコンサート、バレエ、演劇は中産階級を主体とした観客層を対象としていましたが、映画は実に庶民の娯楽でした。本当に当時観客は労働者階級だけだったのか、中産階級もいたのではないかという研究がここ20年ほどされていますが、「ニッケル・オデオン」とは、移民を主体とするアメリカ庶民の文化を表象する命名だったわけです。

1915年のアメリカの平均年収は約700ドルという記録があるので、1日にすると2ドル、1920年では1200ドルで1日にすると3ドル、それで住宅費、食費、衣服、交通費、その他をまかなうわけです。そうすると5セント程度の娯楽は可能だったように思えます。典型的なニッケル・オデオンの劇場は約200席で、サイレント映画の伴奏をするためのピアノや、余興のための舞台がしつらえられていました。1910年までには全米で2,600万人の人々が毎週ニッケル・オデオンを訪れたという記録もあります。まさにニッケル・オデオンを訪れることは、日常の一部でした。

その庶民の慎ましい楽しみが、1920年代には大掛かりなパレスと化したわけです。エジプシャン・シアターでは、1922年に当時の大スター、ダグラス・フェアバンクスが主演する「ロビン・フッド」のプレミア上映では、チャーリー・チャップリンをはじめ映画界や文化界の重鎮やお歴々が出席し、プレミア上映の重要性を定義づけました。この時から、ロサンゼルス郊外の片田舎だったハリウッド

という町が、ロサンゼルスに引けをとらない社会的文化的地位を一気に獲得したそうです。この時の入場料が5ドルで、当時の大金です。このプレミア上映後の一般入場料は75セントから1ドル50セントの間で、特別な映画の公開は差別化されたのです。翌年のセシル・B・デミル監督によるサイレント映画の超大作「十戒」のプレミア上映が行われましたが、上映の前には100名もの男女俳優が古代の衣装をつけて舞台の上に並び、上映を盛り上げました。こうしてプレミア上映をショーとして見せる演出も始まりました。

着飾ったお金持ちも仕事帰りのショッピング・ガールも

お金持ちたちは着飾ってプレミア上映に出かけ、特権化された娯楽を楽しみました。スターの動向は新聞やファン雑誌などで広く宣伝されますから、プレミア上映は、映画製作会社の重要なマーケティング戦略の一部であり、ムービー・パレスは社交の場でもありました。これはアメリカ資本主義の成長とともに急速に発展した映画産業の規模を思い起こさせます。そして平等主義から差別化へ、観客も経済的背景が多様化したことを示唆しています。旧世界のヨーロッパで社会的エリートが楽しむオペラやコンサート、演劇のように伝統的な娯楽に対比して、誰もが、アメリカの地に降り立ったばかりで英語も喋れない移民でも楽しみ、新しいメディアの映画が豪華な劇場で享受される、これもアメリカの民主主義の一環ではないでしょうか。ローズ・シアターでは、着飾ったお金持ちと隣り合わせて、仕事帰りのショッピング・ガールが同じ映画を見て楽しんだそうです。

1920年代末から1930年代にかけての大不況の時期には、辛い現実生活を忘れるために愉しく明るく豪華なセットや衣装を誇るミュージカル映画が流行りましたが、ムービー・パレスも観客が深刻な日常生活から逃避して、一瞬の豪華さを求める場となりました。その後戦争が始まると、戦況を伝えるニュース映画が多く上映され、ムービー・パレスに集う人々は、同じものを見て共感することで、愛国心を深めていきました。しかし、第二次大戦後は反トラスト法の適用で映画会社は解体を繰り返し、テレビの進出もあり映画産業がすたれるとともに、1950年代には閉鎖されるムービー・パレスが続出しました。エジプシャン・シアターも1968年には閉鎖されています。細々と生き残っていたローズ・ジャージー・シアターも1986年にいったん閉鎖されました。

労組対策から始まったアカデミー賞

かつてムービー・パレスできらびやかに展開していた映画のイベントは、ハリウッドに存続し続けました。スターが集結してハリウッドの映画産業を盛り上げるイベントとして最大のものが、毎年2月か3月に行われるアカデミー賞授賞式です。授賞式の中継はTVで世界中に流され、10億人以上の人たちがテレビの前で釘付けになります。私の自宅にTVはないので、ニューヨークでは授賞式の夜は友人の家にいき、何人かの友人とともに見ますが、アメ

リカ人の寸評も面白くてこれは集団で見ると見るべき娯楽だなどと思います。私はスーパーボールを見たことがないのですが、これもTVの周りに家族や友人が集まって見るアメリカの娯楽だそうです。

アカデミー賞中継はまずスターたちが練り歩くレッド・カーペットから始まります。辛口コメントで人気の女性キャスター、ジョアン・リヴァースがスターたちに「あなたの着ているドレスのデザイナーは誰？」と聞いて、そのあと画面に向かって気のきいた、そして多分に意地悪な一口評を言うのが人気となっています。スターが身に着ける高価な衣装や宝石アクセサリーのデザイナーやブランドの名前はTVカメラの前で語られ宣伝になりますから、その夜だけ無料で借りているスターが多いようです。いまやハリウッドとファッション界のシナジー状態は密接です。

元来アカデミー賞は1920年代のハリウッドの映画産業の経営者側の労働組合対策から始まりました。まだ組合が統一化されていなかった監督や脚本家、俳優を自分たちの味方につける方策として映画芸術科学アカデミーが1927年に創設されました。その活動の一環として、映画界での業績を表彰することになり、内輪の催し物として1929年に第一回の授賞式と晩餐会が開催され、約200人が出席するごんまりとした集まりだったのです。それが1931年にラジオ放送され、公共性が付加されるようになりました。授賞式の規模が大きくなり、その支払いに困っていた時に、思わぬ救世主が現れました。映画館を脅かしていたテレビからの中継の申し出で、費用もテレビ局が払うことになりました。1953年に授賞式がテレビ放送されるようになると、「いかに見せるか」という視覚的戦略が重要になってきます。

ハリウッドの素晴らしさを盛り上げるこの祭典に反発する映画人もいます。マーロン・ブランドは1973年に「ゴッドファーザー」で主演男優賞にノミネートされましたが、授賞式はボイコットしました。彼の受賞が発表されると、彼の代理として送り込まれていたアメリカ原住民女性が舞台上上がり、ハリウッドが描く原住民の姿を非難する声明を読み上げました。その結果、1971年に「パットン将軍」で受賞しながら主演男優賞を拒否したジョージ・C・スコットに続き、オスカー史上二人目のボイコットをした映画人となりました。スコットのボイコット理由は、投票という形、俳優の演技を競うという概念自体に反対ということでした。監督・脚本・主演男優賞の部門で20回以上ノミネートされているウッディ・アレンは、授賞式には出ないことで有名です。したり顔の他人に自分の映画の評価をされたくないということらしいです。しかし、アレンが一度だけ授賞式のレッド・カーペットを踏んだ例外があります。2002年です。前年同時多発テロに襲われた自分の故郷ニューヨークの映画作りを支持するという理由でした。

アメリカ社会を反映する授賞式

しかし一般に、政治的メッセージは授賞式では受けません。2003年にドキュメンタリー映画賞を「華氏911」で受賞したマイケル・ムーアが受賞スピーチで当時のブッシュ

大統領批判を始めると、この瞬間を待っていた人たちもいたのですが、会場からブーイングが起り、彼の声は途中でかき消されてしまいました。また赤狩りで非米委員会に協力し、非難反発されていたエリア・カザン監督が1998年アカデミー特別名誉賞を受け取る時には、カザンはマーティン・スコセッシ監督とロバート・デニロというハリウッドの大御所二人に脇を固められ、舞台に登場しました。この時、スタンディング・オベーションをしている人と、座ったまま腕を組んでいる人たちの姿が、会場を映し出すカメラで捕らえられました。意外にもリベラルで知られるウォーレン・ビーティがアン・ベニング夫人と笑顔で大きく拍手をしている一方、ニック・ノルティやホリー・ハンターが苦虫をかみ潰したような表情で座ったままでした。このようなことも、アメリカは画一的ではない様々な見解を持つという価値観をハリウッドが世界に発信したと思います。

作品賞や監督賞など8部門でノミネートされ、男性同士のカウボーイが恋に陥る「ブロークバック・マウンテン」が作品賞を受賞するかどうか注目された2006年では、台湾出身のゲイ（同性愛者）ではないアン・リー監督の最優秀監督賞で終わりました。作品賞は「クラッシュ」という政治的には安全圏のリベラルな人種差別反対のメッセージぐらいしかない作品に終わりました。翌日の朝、NYの近代美術館で上映会がありました。NYの映画の配給やPRなどに関わる人々にはゲイも多いので、この朝ちょっと早めに私が会場に着いたら、すでに論議がされている最中でした。なぜハリウッドは「ブロークバック・マウンテン」を作品賞に選ばなかったかと言うと、約6,000人いる作品賞の投票者のうちの多くが、実はこの映画を見ていなかったそうです。何かと進歩的で少数民族や同性愛者の権利を認めるNYと違って、ハリウッドはまだまだ保守的で、高名な映画監督であるロバート・アルトマンも「男と男がキスをする映画など見たくない」と公然と発言したそうで、これでは当然勝ち目はないとゲイの人たちが興奮して喋っていました。この映画は1960年代に、ゲイということをつか



せば命も危なかった保守的なアメリカ西部で、人間として生きるにはどうすればよいかという悩みを、いずれもゲイではない俳優・ヒース・レジャーとジェイク・ギレンホルの好演で、感動的に描かれていたと私は思います。

3年後の2009年には、1960年代のサンフランシスコのゲイ・ライツ運動を主導し、1977年にアメリカの大都市で初めて同性愛者として市議会議員となったものの、市長とともに同僚の市議に暗殺されたハーヴィ・ミルクの生涯を題材としたゲイの監督ガス・ヴァンサントによる作品「ミルク」が、8部門にノミネートされました。同性愛の教師を公立学校から締め出すカリフォルニア州条例提案に反対して立ち上がり、勝利に導いたミルクの活躍がこの映画の山場のひとつでした。ミルクの政治家としての手腕と人間としての魅力を十二分に演じ、ゲイではない俳優ショーン・ベンは、進歩的政治運動で知られていますが、見事主演男優賞を受賞しました。その受賞スピーチでベンは、受賞会場外側に押しかけた同性愛者反対を訴える人々のデモの憎悪に満ちた精神を非難し、すべての人々の平等な権利を主張しました。この作品ではゲイに対する差別の中で、ゲイに限らず差別されている人たち全体の権利を守るために奔走したミルクの信念と生涯がとても印象的なのですが、脚本賞を受賞したダスティン・ランズ・ブラックの受賞スピーチで私は涙してしまいました。ティーンエージャーの頃ゲイとして悩んでいた時に、ハーヴィ・ミルクの存在に勇気づけられたというのです。そして「有色人種の大統領を選んだこの偉大な国の連邦政府の下、すべての人々の平等がほどなく達成される」と同性愛の少年少女に呼びかけたのです。

映画の原点を確認した一瞬

元来、アカデミー賞の受賞スピーチは私たちが聞いたこともない人々の名前が連呼されて感謝される、それは俳優や監督のエージェントであったり、PR担当だったり、あるいは家族の名前の連発で、しらけてしまいます。その中で私がいまだに心に残っているスピーチがあります。2010年に色彩豊かでユニークなアニメ作品「カールじいさんの空飛ぶ家」で作曲賞を受賞したマイケル・ジョアッキノのスピーチです。無数の風船をつけて空を飛ぶおじいさんの家のイメージの美しさとともに、やさしく楽しい音楽は格別でした。ジョアッキノは個人的な体験から、クリエイティブな世界に進むことの大切さを訴えました。「子供の頃、お父さんのお古のカメラで映画を撮り始め、クリエイティブな世界に進むことを目指していた時に、そんなことは時間の無駄だよと言わずに、両親はいつも自分を奨励してくれました。その後、学校の先生も仕事の同僚もそうでした。それで、今の自分があるのです。こうした環境にいない若者がたくさんいると思うのですが、クリエイティブなことをしたかったら思い切ってやりなさい。時間の無駄なんて、絶対ないのです」とテレビの前にいる世界中の若者に呼びかけたのです。映画とは自分の考えていることをどのように表現するかという創造的分野であり、それに対する努力を評価するのが本来のアカデミー賞のあるべき姿だとい

う、原点を確認させてくれた一瞬でした。このようなスピーチは本当に意味があります。世界中の若い人々に聞いてほしい内容です。

席を埋める人「フィラー」の存在

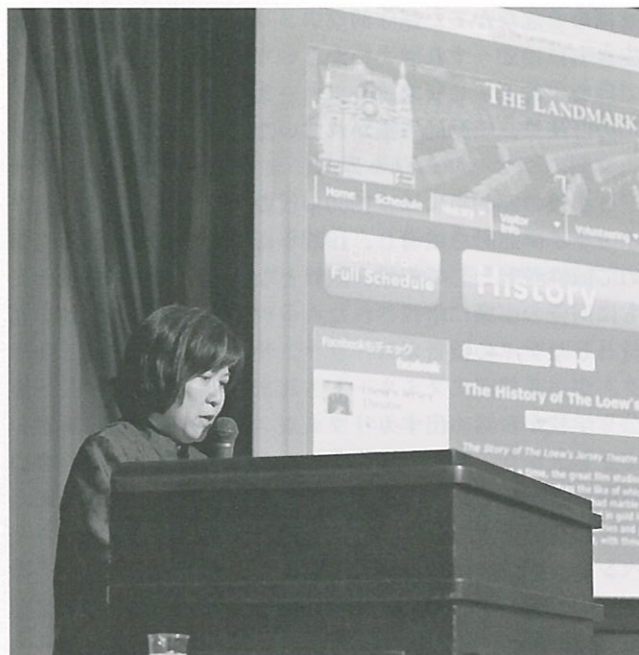
今年の授賞式でも面白い現象がありました。会場の最前列の右のほうに、水色のジャケットにフリルがいっぱいついたシャツを着た見慣れない老人がニコニコしながら座っています。私は友人たちとテレビの前で「あのおじさんは誰かしら」と話していました。プログラムが始まってほどなく、トム・ハンクスが舞台上出てきて、「アカデミー賞授賞式で59年間フィラーの役目をしてきたカールさんを紹介しよう」と言うと、会場中が拍手をしました。「フィラー」とは皆さん何かご存知でしょうか？

アカデミー授賞式はテレビ中継されるので、見栄えのするヴィジュアルが求められます。ところが授賞式は3時間以上もだらだら続く長いものなので、途中であきてロビーで一服する人やトイレに立つ人が続出するそうです。すると劇場内で待機している姿のよい正装の男女が、空いた席に間髪を入れずにすりと座り、テレビカメラが会場を映し出す時に空き席がないようにするのです。その役割を専門にするのが席を埋める人、フィルする人で、フィラーです。

今年の授賞式で最前列に座っていたメルル・ストリープの横に、40代前半ぐらいハンサムなアジア系男性が座っていました。ストリープの夫は白人男性ですし、養子がいるという話もありません。しばらくして、友人の一人が気がつきました。いつの間にかその男性がいなくなっているのです。「あっ、彼もフィラーだったのだ」と誰かが気づきました。イーコール・ライツの徹底している今、フィラーもアジア系がいるのです。きっとアフリカ系もヒスパニック系もいるに違いありません。

しかし、なぜ今年の授賞式で、こうした舞台裏を見せたのでしょうか？ 授賞式の1週間前、2月19日にロサンゼルス・タイムスが報道して、大きく話題になった記事があります。元来秘密投票であるアカデミー賞は、2004年以前に映画芸術科学アカデミー会員になり、アカデミー賞の投票資格を得た人の名前は公表されていません。ロサンゼルス・タイムスが現在5,765名の会員中、5,100名以上の正体を突き止め、本人あるいはその代表に調査した結果、94%が白人、77%が男性で、アフリカ系は約2%、ヒスパニック系は2%以下、アジア系の統計はなかったのですが、平均年齢は62歳、50歳以下の会員はわずか1%でした。これではあまりに白人の高年齢男性中心ではないか、という反応が一気にアメリカ中を駆けめぐりました。ハリウッドがその批判に鈍感なわけがありません。急速1週間何か対策を考えたのかもしれませんが、フィラーのカールさんが「白人・高年齢・男性」の範疇に当てはまるのですが、アジア系のフィラーを一番前の目立つ席に座らせて、「気がつく人は気がついてくださいね。アジア系フィラーもいるんですよ」という演出だったのかもしれませんが。

昨年の授賞式では、若者層に訴えるという一環からか、初めて「フィナーレ」の演目が考案され、その役目を担ったのがインターネットの動画投稿サイト、ユーチューブで人気であった「PS22」の合唱団です。PSというのはいわゆるパブリック・スクール、つまり公立学校のことで、PS22とはニューヨーク市のステイテン・アイランドという地区にある市内最大の公立小学校です。ここにはカリスマ的音楽教師、グレッグ・ブラインバークという先生がいて「ミスターB」と呼ばれているのですが、5年生約60人の合唱団を形成して、ユニークな音楽教育に携わっているのです。



このミスターBがすごいのです。5年生の子供たちといえ、元気いっぱいであるのですが、彼はそれに輪をかけたハイテンションで現れて、子供たちに慕われながら皆を巻き込んで合唱をさせます。人種的・経済的背景が多様なこの地区では、公立学校に通う子供たちの家庭環境はさまざまです。移民の子供たちが多く、中にはホームレスの子供もいます。愛情あふれる家庭でのびのびと育った子供もいます。音楽は心の底から湧き出たものでなくてはならないとこの先生は説き、子供たちは自由に体を動かし、身振り手振り豊かに歌います。PS22合唱団は昨年3月の東日本大震災の後、各自が思い思いの日の丸を描いた絵を見せながら被災地に向けて合唱をした姿がNHKで放映されているそうなので、日本でもご存知の方はいらっしゃるかもしれません。

そこでこのPS22合唱団を2010年のクリスマスに、アン・ハサウェイとアカデミー賞授賞式の製作者ブルース・コーエンが訪れ、彼らを翌年2月のアカデミー授賞式に招待します。子供たちは興奮して大騒ぎになるのですが、ここから2ヵ月後のアカデミー賞出演に向けての練習風景や、ロサンゼルスまでの旅、そして授賞式に出演して「オズの魔法使い」の主題歌「オヴァー・ザ・レインボー」を歌い大成功を収めた瞬間までを記録した「Once In A Lullaby: PS 22 Chorus Story」というドキュメンタリー映画を、今年の4月に私はニューヨークのトライベッカ映画祭で見ました。映画の中でも非常に興味深いアカデミー授賞式の舞台裏を見ることが出来ます。

授賞式前の会場でのリハーサルで、子供たちが舞台上で歌うのを見た製作者が「子供たちが身体を揺らすのをやめて、直立不動で歌って欲しい」と頼みます。それは、アカデミー賞授賞式の式次第が非常に限られた時間という制約から、もし子供たちが直立不動なら1秒間に3、4人カメラを動かしてクローズアップで写せるものが、子供たちが体を動かしていると1人しか写せないという理由です。これもテレビ放送から来る要請なのです。

ミスターBはそれを聞いて大憤慨します。これは普段自分が信条として指導している合唱のしかたと真っ向から対立することだからです。しかし彼は考え直します。世の中に出れば妥協しなければいけない場面もたくさんある。そこで子供たちに「体を揺らさないで歌って欲しい」と頼みます。子供たちは直立不動で歌ってみて「これでは無理だ」

と口々に訴えます。それを「できるだけ、いや、このお願いは無視してもいいけど、君たちと僕だけの秘密の約束にして欲しい」ということになります。さて本番、子供たちはどうしたでしょうか？ 最初はじっとして歌っていますが、気がつくともみな身体が揺れています。

反対意見を言えることの大切さ

このドキュメンタリーの上映後、会場には両親に連れられた合唱団の子供たちもたくさん来ていたのですが、壇上で映画の監督やミスターB、ニューヨーク教育委員会の代表によるパネル討論がありました。観客からミスターBに「この体験であなたが一番感動したことは何ですか？」という質問がありました。ミスターBは、「もちろんあこがれのスターに会えたことです」と冗談を言った後、真面目な顔になって「あのハリウッドの大プロデューサーに向かって、この5年生の子供たちがそんなことはできないと反論した時です。芸術とは自己表現なので、自分の意見を表現できることは素晴らしい。子供たちをあのよう誇りに思ったことはありません」と答えたのです。私はそれを聞いて、なんと素晴らしい教育者なのだろうと感嘆しました。日本にこのような先生はいるのでしょうか？

先月私は、ドイツのケルンで講演をしました。そのとき現地でお世話になった国際交流基金の職員が、幼稚園から小学校6年生までドイツで育った方でした。その方のお話によると、1930年代に台頭したナチス・ドイツの独裁政権に国民がなびいてファシズム体制を形成した歴史への反省から、ドイツの小学校では反対意見を言えるような教育を低学年から重視しているというのです。同じくファシズムを体験した日本では、このような教育をしているとは思えません。「反対意見を言えること」、そしておかしいと思ったことに対して行動を起こすことの重要性を教えることは、日本の教育の大きな課題に思えます。アカデミー賞にまつわることで、日米の教育についても考えさせられた、ということで今日のお話を終わりにさせていただきます。

2012年度総会での各種報告

2012/2013年度役員 (敬称略)

- 会長：文野 千年男
- 副会長：千本 倅生、竹内 洋、住田 良能
森本 泰生、金田 新、
- 監査役：小川 富由
- Alumni Meetings 委員長：神戸 伸輔
副委員長：岩澤 知子
- Hospitality 委員長：外池 滋生
副委員長：越守 丈太郎、松島 たかね
- Publicity 委員長：吉田 哲
副委員長：藍原 寛子
- Administration 委員長：加藤 幸男
- 顧問：行天 豊雄、橋本 徹、南原 晃
有馬 朗人、長坂 健二郎、原田 敬美
- 事務局長：松島 たかね

2011年度決算・2012年度予算比較表

	(単位：千円)	
	2012年度予算	2011年度決算
I 会費		
会費	5,500	5,483
寄付金	0	833
受取利息	0	3
募金手数料	677	570
PC賃貸料	0	120
広告料収入	200	150
為替差益	0	49
当期収入計 (A)	6,377	7,208
前期繰越	17,423	16,958
収入合計 (B)	23,800	24,166
II 支出の部		
給料手当	3,500	1,851
水道光熱費	0	164
旅費交通費	400	75
通信費	1,000	1,180
地代家賃	600	376
事務用品費	85	90
会合費	600	561
会議費	40	62
印刷費	900	825
奨学生費	150	247
什器備品	50	88
修繕費	5	0
消耗品費	25	15
倉庫料	15	27
支払手数料	60	33
図書購入費	50	45
雑費	30	26
損害保険	4	3
保守点検費	50	65
臨時賃金	500	994
接待交際費	10	16
OA使用費	200	0
予備費	50	0
当期支出合計 (C)	8,324	6,743
当期収支差額 (A) - (C)	(1,947)	465
次期繰越 (B) - (C)	15,476	17,423

2011年度会務報告

- 11.04.21(木) フルブライト・プログラム60周年記念事業 第4回実行委員会 (於日米教育委員会会議室)
- 11.05.30(月) フルブライト・プログラム60周年記念 第1回ファンドレイジング(募金)準備委員会(於日米教育委員会会議室)
- 11.06.13(月) 米国人ニュー・グランティエーのための国会および最高裁判所見学ツアー
[国会：江端貴子衆議院議員]
[最高裁判所：寺田逸郎判事]
[参加者]米国人ニュー・グランティエー14名、関係者4名、合計18名
- 11.06.23(木) 2011年度第1回東京フルブライト・アソシエーション役員会 (於学生会館)
- 11.06.23(木) 2011年度総会・講演会・懇親会 (於学生会館)
[講師]藤原 帰一氏 (東京大学大学院法政学政治学学術研究科教授)
[出席者]会員：家族56名、招待者9名、合計65名
- 11.07.01(金) 第23回セミナー (於日米教育委員会会議室)
[講師]寺島 英弥氏 河北新報社編集局編集委員
藍原 寛子氏 フリージャーナリスト・元福島民友新聞記者
[テーマ]「フルブライトがみた東日本大震災」
[出席者]会員他23名
- 11.07.14(木) フルブライト・プログラム60周年記念事業 第5回実行委員会 (於日米教育委員会会議室)
- 11.07.14(木) フルブライト・プログラム60周年記念 第2回ファンドレイジング(募金)準備委員会(於日米教育委員会会議室)
- 11.09.29(木) フルブライト・プログラムファンドレイジング(募金)準備会兼実行委員会 (於日米教育委員会会議室)
- 11.09.29(木) フルブライト・プログラム60周年記念事業 第6回実行委員会 (於日米教育委員会会議室)
- 11.10.07(金) 第24回セミナー (於日米教育委員会会議室)
[講師]小泉 成史氏 フリージャーナリスト
[テーマ]先進国で一番有名な日本の科学系博物館
[出席者]会員名15名
- 11.11.3-11.6 世界フルブライト・アソシエーション 第34回年次総会 (木～日) (ワシントンD.C.) 本年度は不参加
- 11.11.23(祝) 第9回鎌倉ウォーキング・ツアー
[参加者]米国人ニュー・グランティエー 同伴者11名、会員・家族16名、計27名
- 11.12.01(木) フルブライト・プログラム60周年記念募金 第1回実行委員会 (於日米教育委員会会議室)
- 11.12.01(木) フルブライト・プログラム60周年記念事業 第7回実行委員会 (於日米教育委員会会議室)
- 11.12月 NEWSLETTER Vol.24発行
- 12.02.03(金) フルブライト・プログラム60周年記念募金 第2回実行委員会 (於日米教育委員会会議室)
- 12.02.08(水) フルブライト・プログラム60周年記念事業 第8回実行委員会 (於日米教育委員会会議室)
- 12.03.18-20 日光・宇都宮・烏山ツアー&ホームステイ
[参加者]米国人ニュー・グランティエー他10名、会員・家族2名、計12名
- 12.03.27(火) 2011年度第2回東京フルブライト・アソシエーション定例役員会 (於日米教育委員会会議室)

全国同窓会活動

フルブライト夫人を囲んで東北同窓会 仙台の被災地も視察

藤井 建人 (1988 Brigham Young U.)

5月27日午後から翌日28日午前の日程でフルブライト夫人が仙台を訪問された。東京同窓会会長の原田敬美氏と日米教育委員会スタッフのMs.マリーゴールド・ホームズが同行された。東日本大震災の実情を見ておきたいとの夫人の希望実現のための訪問であった。

27日午後1時半から約3時間被災地を訪れた。同行者は通訳資格者の岩淵康民氏(仙台市役所、1988年Syracuse U.)と私、藤井建人(東北同窓会事務局、東北大学、1988年Brigham Young U.)であった。予定のコースは、いずれも太平洋岸から西側約1km以内に位置する、(1)仙台空港(1階中央柱に津波の高さ3.02mの標識有り)、(2)名取市閉上(ゆりあげ)地区、(3)名取市立閉上中学、(4)仙台市立荒浜小学校、それに、(5)キリン・ビール(株)仙台工場であった。が、時間切れのために(5)の訪問は実現できなかった。この間、田畑に放置されたままの自動車等、津波に因ると思われる古くなった海水と雨水とが混ざった臭い、建物基礎のみ残された住居跡などが印象的であった。

27日夕方5時半より約2時間ホテルメトロポリタン仙台の和食「はやて」でレセプションが開催された。東北同窓会からは会長佐々木公明氏(尚綱学院大学、1979 U.of Pennsylvania)を含む8名の出席を得た。フルブライト夫人から被災地訪問の感想や謝意が伝えられた。

また、フルブライト夫人よりフルブライト上院議員との思い出、フルブライト奨学金の理念、クリントン元大統領のフルブライト上院議員事務所での研修、それに、夫人自ら学長を務め運営するHarriet Fulbright Collegeのことなどが話された。

各出席会員が米国留学時代のことを数分間話した。「講義の要諦は3つのI(アイ)、すなわち、Interesting、

Informative、それに、Impressive」と米国人先生から指導されたことなどが有意義であった、かつ懐かしい留学の思い出として述べられた。

ビジネス・プロフェッショナル・フルブライト交流会

三菱UFJモルガン・スタンレー証券株式会社
今関 源規 (2000 U. of Pennsylvania)

2012年7月11日(水)に、ビジネス・スクール、ロー・スクール卒業生及びその他ビジネス・法律分野に関連があるフルブライトの集いとして、第一回目の「ビジネス・プロフェッショナル・フルブライト交流会」をアークヒルズクラブにて開催し、36名のご参加を頂きました。私自身は、2002年にビジネス・スクールを卒業しておりますが、ビジネス・スクール関連のフルブライトの知人が何名かいるもののその数は決して多くはなく、ビジネス系等フルブライトの日本での交流を活発化出来ないかと思ひ、当該交流会を開催しようと考えました。

アークヒルズクラブ会員で会場をご提供頂いた小松雄介氏(1965 U. of Chicago)による乾杯の御発声、東京フルブライト同窓会会長の文野千年男氏(1968 Columbia U.)による御挨拶、出席者の中での大先輩の高田良一氏(1952 New York U.)に閉会の御言葉を頂きました。日米教育委員会からは伊藤智章氏、岩田瑞穂氏にもご出席頂き、フルブライトの最近のファン及び留学生状況等のアップデート情報を頂きました。また、偶然ながら、大河原元駐米大使がアークヒルズクラブにいらっしや、ガリオア・プログラムでの留学経験等の御話を頂戴しました。皆様の御言葉の中にもありましたが、同窓会は通常古い知り合いで集まる傾向がある中、今回の交流会では新しい知り合いを求めて皆様が集まり夫々活発に話されており、さすがフルブライトという共通点(交流による相互理解等を趣旨としたプログラム)を持った方々の集まりであると感じました。



今後とも継続的に当該交流会等を通じてビジネス系等フルブライト間の交流を活発化するとともに、来日するアメリカ人フルブライトでビジネス関係に興味のある方との交流も図っていく事が出来ればと考えております。

第一回目の当該交流会が盛会になったのも、お忙しいにもかかわらずたくさんの方にご出席頂いた事、また、ご出席が難しい方からも当該交流会に対して多くのご賛同を頂いた事があげられます。この場を借りて皆様に御礼申し上げます。最後になりますが、当該交流会開催の為に名簿作成等で多くの時間を割いてサポートをして頂いた竹内健太氏(2012 U. of Pennsylvania)に深謝致します。



東工大新図書館を見学 建築系同窓会を開催

東京工業大学 准教授
阿部 直也 (2002 Cornell U.)

フルブライト奨学金建築・土木・都市・環境系同窓会(以下、建築系同窓会と略称)が2012年3月5日(月曜日)、東京工業大学の東工大蔵前会館のロイヤルブルーホールで開催されました。当初、建築系同窓会は2011年4月に開催を予定していましたが、東日本大震災の影響などを考慮して開催時期を決めないまま延期しておりました。

今回の建築系同窓会には、フルブライトの方々のご家族の皆様など、総勢31名の参加がありました。遠方よりわざわざご参加して下さった方もいらっしや、幹事として非常に感激しました。

当日は、午後6時に東工大蔵前会館(TTF)入口にご参集頂いた後、昨年度東工大に新たに建設された地下2階一部地上3階建の新図書館へ徒歩で移動して、この図書館の設計を担当された東工大・建築の安田幸一教授ご自身による案内で建物内部を見学しました。安田先生におかれましては大変ご多忙のところ、無理なお願いをさせていただきましたが、案内を快く引き受けて下さいました。本誌面を借りて改めてお礼申し上げます。建築関係のフルブライトが多く参加されていたので、館内を見学中にフルブライトの方と安田先生が交わされていた質問の内容が、実に詳しく具体的であったことが非常に印象的でした。

図書館の見学ののち、午後7時ぐらいから、同窓会会場



のホールにて立食形式でメインの同窓会がスタートしました。はじめに、建築系同窓会の世話人である原田敬美前フルブライト同窓会会長からご挨拶があり、その後、懇談を挟みつつ、参加者全員が自己紹介しながら、フルブライト奨学金による留学の思い出の紹介や近況報告などを行いました。

参加者の皆様は各方面で何よりも強い信念をもって活躍されており、フルブライトの重みを改めて感じた時間となりました。途中、ご多忙のところ会場に駆けつけてくださった、サターホワイト日米教育委員会事務局長によるご挨拶も頂きました。最後に原田敬美世話人から2012年5月25日、26日に開催されたフルブライト交流事業60周年記念事業の案内と出席要請、そしてその準備の進捗状況について報告がありました。その後、参加者間の会話が盛り上がり、会場の都合で8時50分ごろ誠に残念ながら閉会となりました。

幹事としては、参加したフルブライトの皆様同士がもう少し話をする時間を確保すべきであったと強く反省しました(皆様の自己紹介に予想以上の時間がかかってしまいました!)。参加者の皆様、申し訳ありませんでした。

本建築系同窓会に参加して下さったフルブライトの皆様のご協力とご理解に改めて誌面を借りてお礼申し上げます。ありがとうございました。最後に、フルブライト奨学金プログラムとフルブライトの皆様との益々の発展と活躍を祈念しつつ、2012年3月に開催した建築系同窓会の報告とさせていただきます。



ガリオア・フルブライト同窓会 全国理事会を開催

文野 千年男 (1968 Columbia U.)

11月9日、日米教育委員会会議室にて同窓会の2012年度第1回全国理事会が開催された。当日はフルブライト記念財団の理事会、評議員会と同日開催となったが、全国11地区のうち7地区同窓会の代表が参加した。

全国理事会は1982年にフルブライト留学制度発足30周年を機にガリオア・フルブライト同窓会が結成された際、全国各地に地区同窓会が結成され、各地区同窓会長で構成される全国理事会が連絡調整機関となることでスタートした。各地区同窓会会長が理事会理事となり、東京同窓会が会長及び事務局を兼ねる形で運営されてきている。

今回は4年ぶりの開催となったが、6月の総会で東京同窓会の会長に就任した私から、ガリオア・フルブライト同窓会の体制や活動について議題を提起、参加者から全国同窓会の組織作りや活動について率直な意見交換が行われた。

同窓会活動の活性化に向けては、①組織の一体化②情報の共有③会員の把握④高齢化対処⑤イベントの工夫、などが共通課題としてあることが話し合われ、今後は会則を定めて、年一回は定例開催の方向で進めること、1988年以来発行されていない同窓会名簿の発行や有意義な魅力あるイベントの工夫、ホームページなど広報活動への取り組みについても積極的な意見が出された。

同窓会としては上記意見も踏まえ、今後の活動に生かしていく所存です。



多額の寄付をして下さった 長村 滋 様を囲んで

(編集部)

全国同窓会理事が集まる機会に、懇親会も開催しました。

「フルブライト・プログラム60周年記念個人募金(第7回個人募金)」で寄付を賜りました長村滋様がお出席されました。長村様は、フルブライターではございませんが、終戦直後、アメリカに留学した数少ない女子留学生のひとりであり、その後日米教育委員会の前身である在日合衆国教育委員会に1957年から1964年まで勤務されました。このたび財団の募金活動の趣旨にご賛同いただき、500万円という多額の寄付を賜りました。

全国同窓会理事や、財団役員が集う機会に、さらに日米教育委員会職員が長村様を囲み歓談、交流を深めました。

財団理事長、飯野正子氏より、感謝状と、副理事長和田昭穂氏より花の贈呈がおこなわれ、長村様のお話を伺いました。



「フルブライト委員会の思い出」 長村 滋 様へのインタビュー

原田 敬美 (1974 Rice U.)

フルブライト委員会の事務局に就いて勤めておられた長村滋さんに、当時の様子や留学の思い出などを聞きました。長村さんからは、今般多額の寄付をいただきました。ありがとうございます。(聞き手は原田敬美前会長)

一戦後まもなく留学されて、ご帰国後にフルブライト委員会にお勤めになられたそうですね。

「はい。1957年から64年迄です」

一当時の委員会はどこにありましたか。

「委員会は九段の裏、靖国神社のそばにありました。それから飯田橋、新橋の方に移り、今は赤坂見附ですね」
一どのようにしてフルブライト委員会にお入りになったのですか。

「有光様という文部省の次官をなさった方を存じあげていて、アメリカから帰国してご挨拶にうかがったら、同じ文部省出身でフルブライト委員会の事務局長をなさっていた西村巖さんが、プログラム・アシスタントをお探しになっていました。それで西村さんを紹介され、すぐに私を採用してくださいました」

一当時の事務局は何人くらいいたのでしょうか。

「そうですね、全部で25、6人でしょうか。総務部、アメリカンプログラム、ジャパニーズプログラム、フィナンシャルプログラム、トランスポーター部門があり、各部長がいっぱいいました。それにアシスタント、タイピストがいました」

一当時、毎年200人くらいの留学生を派遣していたと聞きましたが。

「アメリカンプログラムもプロフェッサーやリサーチャー、大学院生、イングリッシュティーチャーなど結構多くいました」

一長村さんのお仕事はどんなものだったのですか。

「アメリカンプログラムのアシスタント、部長補佐です。ほとんど企画をやらさせていただきました。アメリカのプロフェッサーやイングリッシュティーチャーら留学される方の配置を考えて、日本の各大学に直接赴いて折衝し、お引き合わせをしました。あと、ハウジングですね。小学生のお子さんがある場合は、小学校を紹介しました」

一当時、アパートやマンションなどを探すのは大変ではなかったですか。

「大変でしたが、昔から欧米に関心のある方々がおられ、モダンな洋風の家を探しました。アパートではありません。皆さん一軒家や半分貸してくれた方もいました。私どもが留学生を2、3カ所お連れして探しました」

一日本の大学との折衝にご苦労があったと思いますが。

「アメリカから留学生の履歴書などが来て、日本の大学の方からも回して欲しいという要望書が来ました。ワシントンのアプリケーションに照らし合わせて、大体配置が決まり、お引き合わせすることができました。新潟や岩手など日本の大学を回り、受け入れの準備をします。女性の視点も必要だということで、住宅の状況を視察し、アドバイスもしました。お陰様で、とてもスムーズにきました」

一当時のアメリカからの先生や研究者、大学院生は、敗戦の日本をどう見ていたのでしょうか。

「日本に対して、ある種のシンパシーがある方たちですね。そうでなかったら日本まで来なかったと思いますし、日本の生活に溶け込もうという人が多かった。お子さんも日本の学校に通わせていましたね」

一長村さんご自身のことを伺いますが、戦後まもなく個人で留学されましたね。当時の日本は大変な時代でしたし、どういう想いで行かれたのでしょうか。

「私の祖父も父も裁判官で、いたって保守的でした。都立第6高女(現三田高校)を卒業して、ウィリアム・アキ



スリングという宣教師団の団長のアシスタントをしました。彼は日本語も上手で、日本の憲法を英訳していました。私の勉強態度が真面目だったのか、向こうに行って勉強しないかと言われました。1950年正月の3日、サンフランシスコに着き、私の親類がいるシカゴに行ったところ、留学することになっていたカレッジはダメだと牧師さんに言われたのです。排他的で月謝が高いといわれ、ノースセントラル・カレッジに移されたのです。いま思えば有り難いことで、これも神様のおぼし召しだと思いましたね」
一ノースセントラル・カレッジの留学はどうでしたか。

「大変でした。第6高女では、英語ではなく、オリンピックが来るということでスポーツが盛んで、語学はエスペラントを学んでいました。何しろ英語ができないし、最初はキッチンで働きました。敵の国から来たということで、わざと重いものを持たされたり、最初は苦労しました。しかし、クリスチャンの学校でしたから、だんだん親切にしてくれて、ウェイトレスもしました。とても苦労しましたが、皆さんとても助けてくれました」

一アルバイトをしながらの勉強はどうでしたか。

「本当は法律の勉強をしたかったのですが、一番難しい。それで得意な数学と語学を専攻しました。フランス語とスペイン語は全校一番でした。お陰様で優等で卒業しました」

一フルブライトプログラムのことをお聞きします。最近、留学する人の数は年間50人くらいです。韓国や中国からは100人を超える勢いで心配しています。何か応援のメッセージをいただけますか。

「フルブライトのプロパガンダ(宣伝)が十分ではないのではと思います。一時、もう消えているのではと思っていました。私費でいらっしゃる人も多いと思いますが、もう少し何か分かるようなことをされる方が、よろしいのではないのでしょうか」

一フルブライトの同窓会は熱心に活動していて、世界155カ国中日本の同窓会だけが募金活動をしております。アメリカのクリントン国務長官もお褒めの言葉を述べられています。同窓会へのメッセージがあれば、お願いします。

「皆さんはそれぞれ目的があって、留学し、帰って来られました。日本とアメリカの両国のために経験を生かしてくれれば、私もうれしいです」

『父・金正日と私 金正男独占告白』という本を文藝春秋から出版しましたが、金正男と偶然出会ったことがきっかけでした。本を出してから警視庁の関係者からも連絡があり、「よく書いてくれた。われわれも彼の日本での動向について裏づけ捜査をしていて、クレジットカードの使用履歴などから行動を追っていたが、本に書かれている彼の日本での行動はほぼ正しい」と言っていました。彼は日本には5回来て、定宿の新橋第一ホテルで巨額の両替をしていました。いつも出迎えの人がいたそうです。

本は今年1月20日に刊行したのですが、20万部となり、現役新聞記者が書いた本でこれだけ売れたのは極めて珍しいそうです。読者の4割が女性とかで認識を新たにしました。金正男は2001年に日本から国外退去されたのを大きく報道されて、関心も高かったんですね。

今日のお話は4つのパートにしてみました。①私のフルブライト体験、②この本の話、③北朝鮮はどういう国か、④これから北朝鮮はどうなるのか？

まず①ですが、私は過去2回、フルブライトのジャーナリスト部門の試験を受けました。最初は川崎支局時代、鉄鋼の街だったので都市の再生をテーマに試験を受けましたが、不合格でした。

それでも外国に行きたい、取材したいという気持ちは持ち続けていました。当時、私は川崎の韓国・朝鮮人街に住んでおり、ちょうど会社(東京新聞)で韓国留学の募集をしていたので応募して合格し、延世大学に語学留学しました。

留学の後ソウル支局に勤務しました。金大中大統領の時代でした。この4年間は面白かったですね。2003年からは中国総局(北京)に勤務しましたが、そのころ、平壤で電撃的に日朝首脳会談が行われ、このまま国交回復までいくかもしれないという気運が出ていました。

フルブライト体験ですが、北京勤務が終わった後、もう47歳でしたが、今度はじっくり準備して、2008年に合格しました。留学先は、韓国系アメリカ人のヴィクター・チャ教授がいるジョージタウン大学。期間は10ヵ月。授業に週2回出て、後は朝鮮半島問題のセミナーなどに出席していました。ワシントンDCの大学やジョンズ・ホプキンス大学でも韓国系ではないが、金日成の農業政策の研究とか、高度な研究をしていました。

大学ではヴィクター・チャさんの研究室の前に机をもらっていました。食事に誘われた時に、「どこから情報を集めているんですか？」と尋ねました。すると、意外にも「グーグル・アラート(キーワードをセットすると定期的にネットからニュースを拾い、メールで知らせるサービス)だよ」と言うんです。一般情報をもとに、過去の独裁政権がどういったものだったか、どう崩れたか、崩れた後どうなったか、それを研究しろ、ということでした。

次に②の話です。北京にいたころ、2004年の9月、日朝



交渉が活発化して、外務省の齋木昭隆アジア大洋州局長が北朝鮮の担当者と会うというので、われわれは空港で、北朝鮮の担当者の到着を待っていました。

その時、テレビ局の記者が、「世の中にはよく似た人がいるねえ。あの人、金正男そっくりだよ」と言うのです。小太りでほくろもある。

そこで駆け寄って、「金正男さんですか？」と朝鮮語で声をかけました。すると、「そうです」と言う。おかしいな。そんなにあっさり認めるものだろうか。影武者じゃないか。「写真撮っていいですか」「いま何をしていますか?」「お父さんは？」と立て続けに尋ねました。仲間の記者たちも集まってきた。彼は「何も知らない。父に聞いてくれ」と言います。仕方ないので私は名刺を渡して、「市内からこの携帯電話に連絡してください」と言って、別れました。

「記事にする? ソックリさんか替え玉じゃないか?」などと言いましたが、そそくさと帰る記者もいる。疑心暗鬼になり、わたしも写真と記事を送りました。「北京空港に金正男のソックリさんが現れた」という妙な記事になりました。あんなことを言いながら、各紙とも記事にしましたね。

彼からは連絡ありませんでした。私は後悔しました。タクシーに相乗りしてホテルまで行けばよかった。チャンスを逃したのです。それから「金正男探し」が始まりました。レストランや美容室、高級韓国料理屋などを訪ね、「もし来たら連絡を」と名刺を渡しました。

そんな折、突然のように金正男からメールが送られてきたんです。空港で名刺を渡した記者たち全員に送られたようでした。一応、「金正男からメールが送られてきた」という記事を書きました。その後の一連の経緯は、2007年3月号の『文藝春秋』に「七通のメール」を書きました。

2010年の10月のある日、突然、金正男からのメールが復活したんです。「あなたは私に関心があるようだから、質問を受けますよ」というものでした。私は、「あなたが金正男だという証拠になるものを送ってほしい」と言うと、写真を送ってくれました。ふさふさだった髪がほとんどないけれど、ほくろの位置は同じです。

それからは糸が切れぬように、必死でメールのやり取りをしました。電車の中でも電子辞書を持ち歩いて、仕事中でもトイレでも、携帯からメールを打つなど、必死でした。

「2011年1月に家内とマカオに行くので、ぜひ時間をください」と頼むと、「いいですよ」と言うのです。2011年1月、まず香港に家内と行って、「もし彼に会えたら写真を撮ってくれ」と、練習させました。家内は不機嫌でしたが、金のネックレスを買ってあげるからと約束して、1月14日、マカオのホテルに行きました。

彼は時間通りに来ました。黒いジャケットにサングラスという姿。こっちは緊張します。なにしろ、立ち話ではなくきちんと坐っての長時間インタビューは、世界で初めてです。家内は写真を遠慮なく撮っていましたから、周囲の客たちは何が起こったのかと不審顔。彼も緊張していました。私は一歩突っ込んだ内容に迫ろうと必死です。

2010年9月に北朝鮮では弟の金正恩が正式に後継者として発表されました。その直後、10月に私とのメールが再開されたのは、後継決定と無関係ではないでしょう。金正男は1995年から北京に住んでいますが、それは父・金正日総書記と喧嘩をしたからだと言われています。しかし、彼は父親の悪口は言いません。いい父親だ、優しい父親だと。彼は子供のころから父親と離れて育ち、満たされない愛情で孤独感を抱えています。

一通りの話が終わって、「明日も会えますか。家内はあなたのファンなんです。な、そうだろ?」と無理やり言う。「じゃ、会いましょう」と彼も言う。「オフレコにしましょう」と言うので、メモしないで雑談になりましたが、内容はありました。

いまの北朝鮮は改革開放しようとしてもうまくいかない。北朝鮮に住んでいた時、友達はいないし、遊びに行くこともできない。孤独だったし、彼の存在は秘密にされていた子供でした。彼の母親は人妻だったのですが、強引に離婚させられたからでした。

「このインタビューを記事にして、本として刊行してもいいですか?」と尋ねると、「いいですよ」と言いました。取材を終え、家内には香港で金のネックレスを買いました。結構一生懸命手伝ってくれたので、惜しくはありませんでした。

帰国して新聞に記事を書きました。反響は大きかった。本を書くのにあまり大きな反響はまずいな、と思っていたところ、金正男からメールがあり、「北朝鮮の当局が怒っている。開放のことが一番いけないようだ」というのです。でも、雑談のやり取りしているうちに、だんだん打ち解けてきました。

12月に父親の金正日総書記が死去します。朝鮮では100日の喪が明けるまでは故人の悪口は言わない習慣があります。あちこちから、プレッシャーがかかってきました。メディアから、本の内容について問い合わせが来た。なぜ知っているのか? と尋ねると、文春のホームページに予告が出ているという。もう仕方がない、出しましょう、と刊行に踏み切りました。

率直な肉声と北朝鮮についての分析が、新鮮だったはず。ドイツ・ニーランドに行くなど放蕩息子と思われていたけれど、意外に真面目な人物であることが分かったはず

です。私はジャーナリストの使命は、「既存のイメージを覆すこと」と考えています。

さて、北朝鮮はどんな国か? 人口は2400万人。兵士の数が119万人。韓国との経済格差は39倍とされ、平均寿命はアフリカ並みです。北朝鮮には市場が全国にあり、文房具がよく売れます。教育熱心なんですね。携帯電話は100万台普及しているとかで、1台300ドル。料金が月2850ウォンと高いです。20代から30代の若者の60%は持っているそうです。

食糧難をどう生き延びるかに必死ですが、一般大衆はたくましく生きています。「中東の春」のようなことは、いまのところ起きないでしょう。地方は電気がありません。中朝国境の豆満江では女性たちが衣服を棒で叩いて洗っています。食器も砂で洗います。石鹸がない。女性たちも平気で裸で体を洗っています。服は岩に張り付けて乾かします。

北朝鮮が最近ミサイル発射を強行しました。このため、米国は、2月に栄養補助食品を毎月送るという約束をしましたが、それを反故にしました。ミサイル発射、核実験をすれば、それをテコに交渉してミサイルや核技術を米国が高く買い取ってくれるという計算が北朝鮮にはあるようです。

ただ、核実験はやらないのではないのでしょうか。影響が大きすぎますから。しばらく時をおいて、どこかの節目で挑発するのではないのでしょうか。

金正恩については、4つの見方があります。①七光りの政治をやる。演説のスタイルや内容が金日成とよく似ている。金日成時代、北は韓国よりも豊かだった。金正恩の最近の演説には「金日成」が17回出てきました。軍事用語もあり、軍事優先スタイルは変えないでしょう。「人民生活」という言葉は4回だけで、後回しという印象です。

②若くキャリアがないので大番頭の言うことばかり聞いているという説と、いや自分の意思を主張しているという見方もあります。父親が死去後、100日間にもわたって中朝国境を閉鎖して貿易もできない状態にするなど、若さゆえにより強硬なことをする面もあります。

③勝負にこだわる性格。これは元料理人だった藤本健二が言っています。バスケットボールの試合をしても、兄の正哲はあっさりしているのに、正恩はこだわって「もっとやろう!」と言う。相手を圧倒したい。韓国に対して非常に挑戦的な態度に出っていますが、これも正恩の若さゆえかもしれません。

④スイス留学体験がどう影響しているか? 1991年から9年間いたらしい。自由な西欧を見ている。

その芽が出てきている、と朝鮮総連の関係者は言います。「北の態度がビリピリしたものから柔らかくなった。正恩の警備が20人から5人になりゆるくなった。視察に出ても、いまは群集の中に入って、リラックスして撮影している」と。金正日の料理人で有名な藤本も、「彼が17歳のとき、一緒に酒を飲んだことがあるが、正恩は、『われわれはこうして酒を飲んでいるが、一般人民はどうなっている? 西側は豊かなのに』とつぶやいていた」と言っています。わずかながら希望がある、ということでしょうか。(文中敬称略)

医療の現場は今 — 日米の制度比較 “Reform of the American Health Care System”

ロバート・B・レフラー氏 (アーカンソー大学教授)

1988-89年フルブライght・シニア研究員として名古屋東大法学部、東大法学部に在籍、日本のフルブライghtとも交流のあるレフラー教授による講演会が10月10日(水)、JUSEC会議室で開催された。

レフラー教授はハーバード大卒、医療政策、医療法が専門。アーカンソー大法学部教授、同大医学部非常勤教授で、来年までサバティカルで日本に滞在、東大法学部客員研究員、慶大法学部客員教授。

11月の米大統領選直前に開催された本セミナーでレフラー教授は、国民皆保険やより良い成果を挙げている国民皆保険に代表される日本の医療と、米国の医療改革を比較しながら、米国が歩み出した改革の方向性を解説した。

(藍原寛子 2005 U. of Miami)

米国の医療は「鉄のトライアングル」、深刻なジレンマを抱えている。こうしたジレンマについて最初に述べ、次いで医療制度の大胆な改革について話したい。3番目には2010年3月に成立した「医療保険制度改革法」(「患者の保護及び医療費負担適正化法」(The Patient Protection and Affordable Care Act / PPACA)の内容についての議論と医療保険、Accountable Care Organization (ACOs)。最後に2012年の最高裁判決と医療改革、大統領選、将来の米国の医療改革の見通しについて述べたい。

医療の課題を考えると、大きく3つの点が議論される。「アクセス(受診の機会や医療の提供の状況)」「コスト(費用)」そして「クオリティ(医療の質)」。実はこの3つを同時に満たすことは非常に難しい。アクセスを増やすとコストがかかり、医療の質が下がったり、あるいは医療の質を上げるとコストがかかり、アクセスの機会が減る。日本も米国も、医療政策の立案者や政治家は、この皮肉なトライアングルに苦しみつつ、医療改革に取り組んでいるのが現状だ。オバマケアについても、法案が発表されて以降、さまざまな賛否が寄せられた。結果として最高裁が判断を下したが、それでも議論はやまない。こうしたジレンマを常に抱えるのが医療改革と言っている。ただしその時に忘れてはならない原則がある。それは「公正性」「平等性」そして「正義」である。こうしたことを前提に今後の議論を進めたい。

1. 医療制度の大胆な改革

米国民の医療の現状をまず紹介したい。米国では常に医療保険の問題が議論されるが、では、医療保険に加入していない5千万人の無保険者はいったい、どのような人々であろうか。

雇用の面から言うと、失業者が多いのは当然であるが、成人の無保険者の三分の二は労働者。19歳から64歳までの無保険者を見ると、個人レベルで見た無保険者の割合は、フルタイムの労働者が49%で、失業者36%を上回る。また、家庭全体でみると、こちらでも、フルタイム雇用家庭が67%で、失業家庭21%の倍以上。米国人でもこの事実を知らない人が多いと思う。中小企業が従業員に医療保険を提供していなかったり、民間保険を買う財力がありながらも買わないという現状がある。

人種では、ヒスパニックが常時無保険、一時無保険を合わせて53%が無保険、ついで黒人、白人となっている。

こうした無保険者の問題から、医療費の上昇と国の財政負担が大きくなっている。特にここ近年は医療費の上昇率が急激になっていることも深刻な米国社会の問題として議論されている。これを海外と比較すると、GDPに占める医療費の割合は、日本が8%、台湾が6%であるのに対して、米国は16~17%と倍以上。米国ではほかにも、教育や社会インフラ、環境保護、軍事・防衛などにも財政支出しなければならないが、様々な分野の中で医療費の増加が特に顕著で、様々なリソースが医療に投入されている。

一つの論点として、米国の医療が非効率的である点が挙げられる。医療費の三分の一は「ムダ」なものに費やされているという点は、アメリカ医学研究所(Institute of Medicine)の最近のレポートでも論じられている。例えば、2度3度と繰り返されるレントゲンや血液検査と不必要な処置や手続き。医療ミスを補うための処置。非効率な費用請求や事務作業。最後の非効率な事務手続きについて言えば民間の医療機関が最も効率的で、公共は手続きも遅く官僚的で非効率だと広く考えられている。ところが支出の内訳をみると、公的保険の低所得者向けメディケイドと、高齢者向けメディケアにおける非医療の支出はわずか2%で、これらを事務手続き等に費やしている。残る98%は医療に使っている。対照的に民間保険は公的保険よりも高い5~18%を非医療支出、つまり一般管理費や広告、役員報酬に使っている。「民間保険はより効果的である」と多くの人が考える状況とは、実際には異なっている。ちなみに日本においては非医療支出は2.3%極めて効率的な医療がなされているといっている。

さて、米国の医療トレンドの一例を「肥満」から見てみよう。

1991年に肥満者の割合が最も高い州はミシガン、アラバマなど3州・地域で、その割合は15~19%だった。それが1997年以降は20%という新たなカテゴリーが加わり、2000年には23州・地域で20%となった。2006年以降は30%というカテゴリーが加わり、2010年には13州・地域で30%となった。肥満が急激に増加している。65歳から74歳までの



肥満の人は、同年代の肥満ではない人に比べて倍の医療コストがかかっており、リスクグループに入っている。

医療ケアのコストを下げる戦略として考慮しなければならないのは、肥満対策のほかに、患者は医療の質ではなく医療の量に支出している問題、医療費を支払わない「フリーライダー(タダ乗り患者)」、訴訟を恐れて過剰な検査をすること。また、病気のリスクの少ない人に対して保険を掛けようとするが、遺伝的な病気の傾向がある人や病気のリスク群に対して保険を掛けないなどのリスク群の選別が行われている問題も考えなければならない。

そこから考える「医療の質」「費用」そして「正義」について述べたい。米国の医療は、特別なケアを受けられるという点では優れているが、国民が誰でもそのケアを受けられるようにはなっていない。その点で、途上国よりも遅れている部分がある。また必要な時にケアを受けられなかったり、たくさん治療がわずかな利益あるいは赤字、あるいは低水準の内容で提供されている。医療制度の持続性、継続性から言って、絶え間ない医療費の上昇は大きな問題になっている。

2. 2010年3月に成立した「医療改革法(患者の保護と適切な医療ケアに関する法)」

(The Patient Protection and Affordable Care Act / PPACA)

そうして、民主党と共和党が激しくぶつかり合う(The Brutal Politics of Health Reform)医療制度改革が成立した。オバマは2009年春、二大政党主義の中における一体化を特に医療改革で促した。ところが、批判が殺到した。共和党のサラ・ペイリン元アラスカ州知事は、「死の審議会」といってオバマケアの終末期医療を批判したほか、「医療面でのカルチャー戦争」的な対立を表出した。それ以降、共和党は総当たりで法律を批判し、最高裁まで最終的には26州が違憲訴訟を起こした。PPACAの導入を拒否する州も出て、保健社会福祉省(DHHS)は新たにACOs(メディケアの患者の治療を保障する保険組織)を設立して、そこで保険を肩代わりさせる対案を出した。

結論としてPPACAは無保険者5千万人のうち3,200万に医療提供を可能にし、10年間で9,400億ドルの支出を見

積もっている。

ここで最初に話した鉄のトライアングル3点から見ると、まず受診機会の点(アクセス)では、すでに2010年から26歳までの成人の被扶養家族への保険加入をスタートさせたほか、2014年には遺伝や慢性疾患などを理由にした医療保険加入拒否の禁止や、非加入者へのペナルティ(罰金)、低所得者への保障と費用負担などを順次実施。つまり、保険の加入は個人に任されるが、罰金も課すことで、加入に強制力を持たせ、医療へのアクセスを保障した。ただし、支払いが厳しい米国人や不法滞在者には課さないこととした。

コスト面では、IPRBというメディケア費用のコントロール機関の設置、個人のメディケア事前計画による過剰支払いの防止、そして2015年にはすべての医療費支払いの電子化などが行われる。

最後に医療の質だが、基本的な医療についてはエビデンスに基づいた医療パッケージを準備し、初期治療の医師や看護師、歯科医師、セラピストなどに対してボーナスを支払い、初期治療の充実を図る。より良い成果を上げた治療に対して支払額を引き上げ、調査機関と連携した成果リサーチを取り入れる。ただし、これらは最初の一歩との批判もあるのだが。

今年9月の医学誌ニュー・イングランド・ジャーナル・オブ・メディスン(NEJM)は、この医療改革により、ニューヨークやアリゾナ、メーン州では目覚ましく死亡率が下がるとの論文が発表された。しかし多くの州は、PPACAへの参加を拒否している。

3. 医療改革と大統領選、将来の米国の医療改革の見通し

さていよいよ11月6日、大統領選が行われる。大統領選と同時に、上下院議員選挙も行われる。PPACAの動向を考えるには、果たして大統領にオバマが再選されるのかだけではなく、上下院の勢力図も同時に考えねばならない。現在上院は民主党、下院は共和党が過半数をそれぞれ占め、ねじれが起きている。今後の動向として①上院民主党、下院共和党がそれぞれ過半数でねじれ継続、②上院、下院ともに与党民主党が占める一の場合が考えられる。この二点においては、いずれもPPACAはイエスで継続するであろう。

一方で、PPACAが拒否される場合も想定される。ロムニーが大統領となり、①上院が民主党、下院が共和党、②上院、下院ともに共和党一の場合。

また難しいのが、大統領がオバマで、上院、下院ともに共和党が過半数の場合。そのような意味では、最高裁の判断とは別に、法律廃止の可能性も無視できない。このように、医療改革と政治の動きを同時にみることにより、より米国社会の現実に対して理解を深めることができるだろう。



2012年度日米教育交流振興財団奨学生冠名リスト

採用者数	採用者種別	数
Fulbright Fellows (Recent B.A.)	…FF	6名
Graduate Research Fellows (Graduate Students)	…GRF	4名
Graduate Students - Japanese	…GSJ	1名

冠名(敬称略)	奨学生氏名	カテゴリ	受入大学名	出身大学(最終)名
<Americans>				
三上基金	FAGER Dana A.	FF	名古屋大学 経済学部	U of Illinois at Urbana-Champaign Business Management
三上基金	JAMISON Kevin T.	FF	九州大学 経済学部	U of Redlands (Business Management & Administration)
志野基金	WAROFKA Alexander	FF	関西学院大学 国際学部	Case Western Reserve U (Economics)
日米教育交流振興財団	MARET Elizabeth L.	FF	筑波大学 数理物質科学研究科	Connecticut Coll. (Physics)
日米教育交流振興財団	WORD Cameron L.	FF	立命館大学 SKP プログラム	U of Arkansas (International Relations)
日米教育交流振興財団	MOSEL Jamie E.	FF	北海道大学 農学部	St.Olaf Coll. (Ecology)
公財) 吉田育英会 (YKK)	BUSHELLE Ethan D.	GRF	立教大学 文学研究科	Harvard U (Japanese History)
日米教育交流振興財団	NELSON Craig D.	GRF	東京大学 社会科学研究所	Ohio State U (Japanese History)
日米教育交流振興財団	O'REILLY Sean D.	GRF	京都大学 教育学研究科	Harvard U (Japanese History)
三菱	ERICSON Kjell D.	GRF	神戸大学 国際文化研究科	Princeton U (History)
<Japanese>				
公財) 吉田育英会 (YKK)	大鳥 由香子	GSJ	Harvard U (History)	東京大学大学院 (総合文化研究科)

日米教育交流振興財団の状況

○下記ホームページ、日米教育交流振興財団「ディスクロージャー資料」にて、次の資料を公開しております。

http://www.fulbright.or.jp

- 1) 定款 2) 役員名簿 3) 事業報告書 4) 貸借対照表 5) 正味財産増減計算書 6) 財務諸表に関する注記
7) 財産目録 8) 事業計画書 9) 収支予算書

公益財団法人 日米教育交流振興財団・地区別役員等 (敬称略・50音順)

地区	評議員	理事	監事	顧問	審査委員
北海道	小柳 知彦	山岸 俊男			曾野 和明
東北		佐々木 公明			佐々木 公明
東京	太田 隆次 長坂 健二郎 早川 与志子 原田 敬美 福田 学	(理事長) 飯野 正子 (副理事長) 和田 昭穂 賀来 景英 金田 新 藤田 幸雄 文野 千年男	舟橋 定之	(最高顧問) 大河原 良雄	(審査員長) 五十嵐 武士 印南 一路
中部	塚田 守	星野 靖雄			木下 徹※
北陸		藤原 哲也			橋爪 祐美
京滋		石原 直紀 細谷 正宏			千葉 哲郎
大阪	長谷川 明子	清澤 悟 大津留 智恵子			加島 聡
中国		大津 章			
四国	太田 英章	戸澤 健次			木村 榮一
九州	落合 太郎	稲垣 良典			高橋 勤
沖縄		比嘉 幹郎			瀬名波 榮喜

※審査委員 藤本 博氏から2012年7月に木下 徹氏に変更

吉田育英会 (YKK) 三菱

財団冠奨学生表敬訪問

冠 企 業 訪 問

スカイツリーの窓も作る

YKK (吉田育英会) R&Dセンター訪問

イーサン・ブッシュェル (2012 立教大学)

10月11日という日本の小春の日にYKKのR&Dセンターに行って参りました。フルブライト奨学生アラゴン・クインさんと私が、YKK常務理事鈴木茂男さんをはじめ、事務局長佐久間功さん、事務局関口由希子さんにお会いし、暖かくお迎えいただきました。

YKK R&D センターのスカイロビーにあるおしゃれなイタリアンカフェで、とてもおいしい昼ご飯をご馳走いただきながら、YKKについての話をうかがいました。チャックで有名な会社はそれだけでなく、最近テレビにも出ているあのかわいい猫ちゃんが冬の中に暖かい窓のとなりになすわって寝転ぶというCMが示しているように建材事業から工機までもやっておられるということは既に見てきましたが、YKKは製品を作る以上に、いろいろ奨学金へのサポートもやっているという話は常務理事鈴木茂男さんがしてくださいました。日本、そして、グローバル社会への貢献を目指して、理系から人文系まで幅広い研究を援助しておられます。私とそのすばらしいYKKの奨学金活動の受益者の一人だということをお聞きすることができました。

そして、昼ご飯の後に屋上へご案内していただき、東京スカイツリーの絶景を楽しませていただきました。そこで、鈴木さんが教えてくださったのは、スカイツリーの微妙な形をしている窓もYKKが作ったということです。それを聞かせていただき、改めて私がYKKのご援助のもとに研究をやっていることを誇りに思いました。

(ハーバード大 東アジア研究学科博士課程、研究分野は日本宗教文化史)

次の世代に日本文化を伝えたい

アラゴン・クイン (2011 筑波大学)

私は2011-2012年のフルブライト大学院研究生で、明治、大正時代の演劇について研究しています。YKKはフルブライトと長い歴史があり、鈴木常務理事は同じレストランでミセス・フルブライトと食事したことがあるそうです。YKKは社会にも貢献して、日本の人文学の重要な保護を

することが分かりました。YKKのおかげで大変貴重な経験をさせていただきましたので、研究生の私達が次の世代に日本文化を伝えていきたいと思っています。

三菱金曜会訪問

シェル・デビッド・エリクソン (2012 神戸大学)



11月12日に日米教育交流振興財団の理事長、事務局長に同行いただき、東京・丸の内にある三菱グループの三菱金曜会事務局で、事務局長の西村敏行様、総務部長の新田英雄様にお会いしました。

秋のきれいな景色を楽しみながら、貴重な時間が過ぎました。さらに私の研究テーマ、真珠養殖の歴史について説明させていただくことが出来て嬉しかったです。

今年日本で研究する機会が与えられて、光栄の至りに存じます。このフルブライトの一年間を利用していただき、自分の研究を更に進めたいと思います。真珠養殖拠点の三重県で再び調査する予定を立てております。研究の実りを今後もお伝えしたいと思います。

Courtesy visit for Mitsubishi

グレゴリー・デ・セイント・モーリス (2011 京都大学)

The opportunity that Kjell and I were offered to meet the representatives from Mitsubishi, who are generously supporting our research projects in Japan, was one that I had been looking forward to since I first received an invitation to meet with them in the fall of 2011—before I had even left for Japan to begin my fieldwork in Kyoto. It is a rare opportunity to be able to directly thank those who are backing your research and explain to them exactly what it is you are doing. When our group of seven met over lunch in the Mitsubishi Shoji building, overlooking Hibiya Park in its full fall colors, the conversation was lively and I was moved by the interest that was shown in both Kjell's project and mine. I am grateful we were given this chance to meet representatives from Mitsubishi's Kinyoukai, to share food with them, and to be able to talk with them about my research.

同窓生の短信&掲示板

『研究開発における創造性』出版

河野 豊弘 (1950 U. of Pittsburgh)

最近、次の新著を書いた。『研究開発における創造性』(白桃書房、2009年2月刊行)。本書はすぐに再刷された。筆者は既に20冊以上の著書を書いている。(筆者は第1回フルブライト留学生)。

足を引っばる評論家をなくそう!

多田 稔 (1969 Columbia U.)

「決める政治」を実行した野田首相を、「どうせ出来るはずがない」と言った評論家。「国会議員を半分にしよう」と言った橋下大阪市長を「出来る訳がない」と言う評論家。長期的で広い視野をもたない評論家を、フルブライトの皆様が指導してやって下さい。日本版(M.サンデル教授流の)「白熱教室」を望む者です。

まだまだ気力十分

太田 正利 (1953 Brown U.)

渡米後、半世紀を経過した。その間先ず外交官として欧州、東アジア、アフリカ(最後は駐南ア大使)と歩き、その後大学教授に。引退後は評論家として論陣を張っている。不思議なことに、米国には出張の機会は多かったが、ついでその間居住の機会が無かった。もともと欧州の専門だが、折角の対米経験をさらに深化させたいところ。まだまだ気力はあるぞよ!

ホストファミリーと40年ぶりに再会

島岡 丘 (1958 San Francisco State U.)

最初の留学からもう半世紀以上が過ぎました。1998年に40年振りにアイオワ州のホームステイ先のHoeyご家族と再会しました。ご自宅の地下室にミニ図書室を作られましたが、10巻の文明論全集とインディアンに関する文献が目立ちました。それから10余年が過ぎ、今年は震災のお見舞いと関連する新聞の切り抜きをいただき、国を越えた友情と親しみを新たに感じています。

あと一息

久世 篤 (1979 Harvard U.)

いよいよか。定年のあいさつ状が次々と届く。時代に恵まれた団塊の世代の終わりの始まりを実感。ジャパン・アズ・ナンバーワン時代の留学は夢のまた夢。日本車がハンマーで叩かれ、米国がイラン大使館人質事件で大国の威信に陰り。日本が成功例のアリで米国はギリギリの役回り、成功のヒミツをやたら聞かれたものだ。今や日本以外の事は。野田首相のように命を懸けるものも無く、年金受

給まであとひと働き。もう一息か、ため息か。

フルブライト同期3人との交友

高橋 淳一 (1961 U. of California, LA)

振り返れば1961年はもう51年前。結婚した娘の家族がボストンに住み着いた縁でフルブライト同期3人の付き合いが復活し、ボストンに行く度に夫婦で娘の家で同期の交友を楽しんでいます。娘は3人のドキュメント映画を作ってあげると張り切っていましたが、このところ自分の離婚騒ぎでしばし休憩です。

伊原さんとは東京でもお会いしますが、久野さんとはボストンでしかお目にかかれません。今度は東京やりましょう! 今年はボストン市庁前とボストン空港で復活した伊原作品の展示を楽しめました。皆さんお元気で!

『金(ゴールド)が通貨になる』出版

谷口 智彦 (1991 Princeton U.)

幻冬舎から新書で『金(ゴールド)が通貨になる』を出しました。米国にしかない金本位制復活論議を、宗教や歴史にルーツを探りつつ見たものです。邦字紙誌に出ない話だけ集めてみました。同じ版元からラムズフェルド元国防長官の回想録(『真珠湾からバグダッドへ』)も出ました。事実上の監訳と、解説を担当しました。嫌われ者の自伝は面白い。いずれもお目に触れましたら幸いです。

Japan in Trade Isolation 出版

池田 美智子 (1962 Harvard U.)

日本はなぜ太平洋戦争に参入したかを日米、欧州、中東の新データで解明したHarvard Ph.D.論文を、遅ればせながら2009年12月に出版。また、戦後ケネディラウンドでも変わらなかった対日不平等などGATT契約の真実の解明に基づくJapan in Trade Isolationをアイハウス・プレス(国際文化会館)から英文出版しました。WTO(ジュネーブ)書店などでも販売しています。

『3.11とグローバルデザイン』出版

長島 孝一 (1963 Harvard U.)

昨年、東京で国際建築家協会連盟(UIA)の世界大会が開かれ、日本建築家協会(JIA)のシンポジウム「災害復興・グローバルデザインを考える」をまとめた本、『3.11とグローバルデザイン』が鹿島出版会から出版されました。グローバルと、気候、風土、文化、歴史に基づいたローカルとを止揚して、本質的な建築・まちづくりを目指す必要を説いたもので、小生も共著者です。日英併記ですので国際的に流通させたいと思います。印税は全て被災地に寄付致します。

『サイバー防犯対策ガイドブック』出版

末藤 高義 (1963 American U.)

懐かしくなりお便りしました。この程『サイバー防犯対策ガイドブック 基礎知識から実践対策まで』を刊行いたしました。出版社は民事法研究会(Tel.03-5798-7257)です。クレジットカードやインターネット関連の分野で7冊目の本です。司法関連分野でよく読まれています。日銀退職後20年、元気でやっています。

夢幻的軽井沢の写真展開催

Tom Haar (2008年グランティアー)

トム・ハールさんの写真展が8月、軽井沢と横浜で開催され反響を呼びました。

ハールさんはハワイ在住の写真家。ハールさん一家は第二次世界大戦中に軽井沢に強制疎開させられていました。父親のフランシスさんはハンガリー出身の写真家、欧州で活躍していましたが、戦禍を逃れるため1940年来日していたのです。

疎開当時、トムさんは幼児で軽井沢の記憶はあまりありません。しかし、父親の伝記を書いたのをきっかけに軽井沢への関心がわき、2008年夏、現地に滞在し昔の思い出を求めて別荘地を歩き撮影しました。

今回の展覧会はその時の写真を展示したものでリアリズムではない夢幻的な作品が並び、不思議な雰囲気を出していました。(小泉成史 1984 M.I.T.)

国際教育事業に邁進

大井 孝 (1965 Columbia U.)

一般財団法人国際教育振興会理事長として「日米学生会議」「外国人による日本語弁論大会」「全国中高校教員による英語弁論大会」などを毎年主催、1945年11月開講の「日米会話学院」の運営。FB同窓生の行天豊雄氏、佐藤ギン子氏、南原晃氏に当会の理事をお願いしております。
www.iec-nichibei.or.jp
2008年の拙著『欧州の国際関係1919-1946』特価4千円です。

『教育行政学：教育ガバナンスの未来図』出版

米原 あき (2002 Indiana U.)

近刊(年末発行予定)のご案内です。小松茂久編『教育行政学：教育ガバナンスの未来図』昭和堂。

第11章「グローバル時代の教育行政と教育ガバナンス：世界の視点で日本の教育を考える」を執筆させて頂きました。大学学部生～修士課程1年生を想定した教科書です。従来の「教育行政学」の枠組みを超える、「教育ガバナンス」としての視点を提示しよう!という大変意欲的な内容になっています。お手に取って頂ければ幸いです。

放送大学の学生たち

菅野 峰明 (1972 U. of Georgia)

2年前に埼玉大学を定年退職後、放送大学埼玉学習セン

ターの所長を務めています。

放送大学には日本各地に50の学習センターがあり、ここで面接授業(スクーリング)を開いています。また視聴覚学習室には再視聴のための機材が置いてあり、学生たちは自分の自由な時間にここに来て、放送教材を借り出して勉強しています。10代から80代まで幅広い年齢層の学生が学びにやってきます。

個人情報保護の新刊2冊ご案内

小笠原 みどり (2004 Stanford U.)

世界でも日本でも個人情報の収集と流出が激化していますが、共訳書『監視スタディーズ～「見ること」「見られること」の社会理論』(デイビッド・ライアン著、岩波書店)、共著『共通番号制なんていらぬ!～監視社会への対抗と個人情報保護のために』(航思社)が出版されました。フルブライト・ジャーナリスト研修の成果が詰まっています。ぜひご関心をお寄せ頂ければ幸いです。

心にしみる交流

小中 陽太郎 (1983 West Virginia U.)

- ① アメリカ大使館主催「人物交流プログラム」と国際映画祭共催の“rebirth”観賞、「9・11」のあとの7年間を追う人間ドラマ、来日のウェテカー監督に思わず手を挙げて、私事ながら、最愛の人を失った娘の苦しみと合わせて質問、心にしみる交流ができた。
- ② 処女作以来40年ぶりの歴史物『跳べよ源内』上梓、「評伝とは懐疑を捨て、己の分身を歴史の中に探ることだ」という見事な匿名批評に接し、作家冥利に尽きる。源内先生曰く「鞠も落ちずば上がり申さず候」と。

第1回交換留学生の渡米

池本 洋一 (1953 U. of Wisconsin)

私たち第1回フルブライト交換留学生(内、教育関係者は30余名)は、1953年9月に、元海軍の病院船に徴用されていた「氷川丸」で、横浜港を沢山の見送人に送られて出航し、約2週間を経てシアトル港に着き、上陸後、寝台専用列車で4日半を要してワシントンに着き、ここから各地の大学に分散留学しました。未だ米国も都市間の航空機関が今程発達しておらず、多くの人が鉄道を使用しており、車内は賑やかで、楽しいものでした。

フルブライトの恩

兼松 重任 (1958 Harvard U.)

U.S.A.は、米国への渡航費もない私にそれを与えていただき、5年間の留学費用もまかってくれた。この間に世界から注目を受ける論文などたくさん業績をあげることができた。おかげ様で国立大学の教員に採用されて、教授として学術の進歩と教育を通じて国と世界のために貢献できたと思う。フルブライト・プログラムには何を恩返しできるだろうか。考えさせられる。

国会・最高裁を訪ねて

(編集部)

7月9日(月)、梅雨の晴れ間の汗ばむ陽気の中、国会・最高裁ツアーが行われました。参加者は、米国人グランティ4名、文野会長、舟橋財団監事、スタッフ1名の総勢7名のこじんまりしたツアーになりました。

午前9時30分に東京フルブライト・アソシエーション事務局で集合し、一同国会に徒歩で向かいました。

国会では、米国人グランティから国会議員で女性を占める比率について質問があり、衆議院479名のうち女性は52名(10.8%)、参議院242名のうち女性は45人(18.6%)との説明がありました。列国議会同盟(Inter-Parliamentary Union)によると、世界の議会における女性議員の割合は19.2%(2011年3月末)で増加傾向にあるが、日本の衆議院議員に占める割合は186カ国中121位と低いそうです。天皇陛下のための御休所、中央玄関、中央広間などを回り、一般のコースにない中庭ではグランティは鯉の多さにびっくりしていました。

議事堂前で集合写真を撮った後、衆議院議員会館に移動しました。集中審議など多忙な江端貴子衆議院議員(1990年 MIT)のお話を伺いました。米国人グランティが、介護制度は変わったかという質問に対して、残念ながら変わっていないが、介護制度のための予算を多く計上し、実現に向けた努力を力説しました。

国会の議員食堂で昼食をとり、最高裁判所に向かいました。大法廷では、高等裁判所までの手続きや判決に憲法や法令の違反がないかを判断することが中心で、証言台や被告人席がありません。15人の裁判席にグランティが座って写真を撮ったりしていました。さすが日本一広い法廷です。入った瞬間、背筋がピンと伸びました。

見学後、大橋正春判事を表敬訪問しました。大橋判事は、平成24年2月に弁護士から最高裁判事に就任された方で、日米の制度の違いを説明してくださいました。日本の最高裁には年間6000件を超える訴訟が持ち込まれ、判事1人当たりの件数は年400件を超えるそうです。米国最高裁にも年間7000~8000件が持ち込まれますが、何を取り上げるか



は基本的に最高裁の裁量であるところが日本とは違います。また日本の裁判官は70歳で定年を迎えますが、米国には定年はないそうです。

大橋判事は、米国人グランティの専門分野に興味をもたれ、一人一人に専攻を聞きました。ご自身も弁護士や裁判官を主人公にしたミステリーや海外のドラマをご覧になれるそうです。

今回は特別に判事補の鎌倉正和様より「司法制度」についての講義を頂き、午後3時30分ごろ最高裁ツアーが終わりました。皆様にとって日頃の学術研究から少し離れ、日本の仕組みや制度を知る有意義な一日になったと思います。

茶道や和紙づくりを体験 日光ツアー

(編集部)

2012年3月18日(日)から春分の日(3月20日)の三連休に日光ツアーが開催されました。昨年は震災の影響で実施できなかったが再開されました。

10人のアメリカングランティが参加。宇都宮に集合し、茶道体験、和紙制作体験、日本酒酒蔵見学、日光の明智平、華厳の滝、世界遺産の二社一寺観光をおこないました。

小雨に降られることもありましたが、日本文化と自然に親しむ休日となりました。



第36回日米フルブライト交流 チャリティ・ゴルフ大会

吉田 哲 (1977 Harvard U.)

前夜からの冷たい雨は朝方に止み、青空が広がる秋晴れに恵まれました。高気圧のように「張り出す力」が強いフルブライトの威力なのか、「晴れ男」「晴れ女」が多かったのでしょうか。

10月29日午前8時半、戸塚カントリー倶楽部の東コースと西コースに分かれてスタート。ドライバーショット第1打。きちんとフェアウェイの真ん中に落とすベテランもいれば、緊張と力みのせいか右や左に飛ばす人も。でも、みんなニコニコ手を振ってコースに出て行きました。

チャリティ・ゴルフ大会は、今年で第36回を迎えました。昨年の大会は3月11日の東日本大震災で中止となり、2年ぶりの開催でしたが、30組、総勢115人が参加。規模もプレーも、より充実して、復活しました。

10月初め男子プロのキャノンオープンが開かれた西コースは、やはり難コースのようでした。また、グリーンは2つを合わせたせいか、アンジュレーションは微妙な起伏があり、特に東コースを回った方々はパットに苦労していたようです。

皆さん、プレー時間もハーフ2時間ちょっとで回った組が多く、午後3時45分ちょうど交流会開催。日米教育委員会事務局長のサターホワイトさんの司会によるオークションで盛り上がり、最後に成績発表。一昨年の西コースに続き、女性が優勝しました。しかも、東西両コースでの快挙です。

西コース優勝 堀 佳子様 (グロス 110、ネット72.2)
準優勝 山口喜久様 (75、72.6)

東コース優勝 川崎和子様 (92、71.0)
準優勝 田中和代様 (90、71.4)

このチャリティ大会で集まった浄財は、日米の留学生の約1名の費用を賄うことが出来、大変有意義な大会です。あらためて大会実行委員、スポンサー、賞品寄贈や寄付をしていただいた企業、個人、そして事務局の皆さまに感謝と御礼を申し上げます。来年は10月21日に開催予定です。



秋の鎌倉を歩く会

吉田 哲 (1977 Harvard U.)

11月23日の勤労感謝の日は、恒例の鎌倉歩き会。薄曇りで気温も上がらず、分厚いオーバーやジャンパーの冬装束で皆さん参加しました。予定していたアメリカン・グランティーら3人から朝早く携帯電話に不参加の連絡があり、ちょっと残念でした。

それでも集合場所の鎌倉駅北口には、ホスピタリティー委員長の外池滋生氏 (1990 MIT) と奥さまのご夫妻、文野千年男TFA会長がすでに到着。さらに鎌倉在住の浜田利郎氏 (1969 Columbia U.) と一番若い越守丈太郎ホスピタリティー副委員長 (2007 Georgetown U.) も揃っていました。参加のアメリカン・グランティーは、2人と友達1人の計3人。

今回は少なかったのですが、ゲストの名前をすべて記すと、東京大学で歴史を研究しているTimothy S. Georgeさん (University of Rhode Island)、千葉大学の Dr. Mary Umlaufさんと友達のMira Koykkaさん。

合計9人で江ノ電に乗り、長谷寺へ。時折、弱い雨に遭いながら、長谷寺の山門をくぐり、花々を楽しみながら階段をゆっくりと上る。紫陽花など四季折々の花が楽しめるのも有名ですが、秋はやはり紅葉。うっすらと赤みを帯びて緑と黄色のコントラストがあざやかでした。

まず本堂の観音堂で、十一面観世音菩薩像を見学。9メートル以上の木造観音で、日本最大級の木彫仏。ご主人が彫刻家という Mary Umlaufさんは「これだけの彫りは高い技術が必要ですね」と木彫りの精巧さに驚いていました。本堂から出たところで、記念撮影。そして、由比ヶ浜や遠く三浦半島、相模湾が見渡せる見晴らし台でもパチリ。Timothy S. Georgeさんは、デジカメ持参でカラーではなく白黒モードに自動セットして写真を撮っていました。「これの方が芸術的にみえる」と言いながら私を撮ってくれたのですが、白黒になると確かに私の顔も芸術的!? にみえます。

若い男女が静かに写経をする弁天堂を通って弁天堂へ。岩窟の中に弘法大師が自ら彫ったといわれる弁財天と十六童子が暗闇の壁に並び、それぞれ五穀豊穰と厄除けや交通安全、商売繁盛、恋愛成就などの童子がおり、「日本はいろいろな神様がいるのね」と Umlaufさんの友達のMira Koykkaさん。彼女はフィンランドからの研究生で、千葉大学に3か月滞在しています。長谷寺を出たところで、参加予定の筑波大学の Veronica Weserさん (Vassar Coll.) から「遅れてすいません。いま鎌倉の駅」という日本語の電話連絡。私たちが向かう大仏で落ち合うことになりました。大仏様までは皆さんそぞろ歩きしながら、鎌倉に住んでいるGeorgeさんが「私の一番好きなお店のひとつ」という竹細工で籠などをつくるはなごの店に寄り道。

大仏がある高德院では、Veronicaさんがここにこしながら待っており、文野会長や外池ホスピタリティー委員長らもほっとしながらあいさつの握手。ここでも記念撮影。参

加者も増えて合計10人になりました。その後は、各自の自由散策ですが、ほとんどの参加者はゆっくりと鎌倉の裏道小道を歩き、途中買い物やお茶の休憩を楽しみました。越守さんと私は、鶴岡八幡宮へ参拝。ちょうど境内では結婚式があり、神式の赤と黒と白の装束が印象的でした。

そして午後5時、懇親会場の駅前「和民」に集合。浜田さんと同様鎌倉に在住の宮原英夫さん (1964 MIT) がここで合流。文野会長の音頭で乾杯、鍋をつつきながら歓談しました。ところで「鍋奉行って知っていますか」とゲストに質問。要するに料理の手順をDominateしたい人のことですよ、などと鍋談義。宮原先生は1ドル=360円時代に渡米し、医学とコンピューターの融合を研究していたというから先見の明がすごい、などと感嘆。皆さん顔をやや赤く染めながら留学体験や最近の政治や経済、さらに「アメリカ人は好きではないらしいですけど、私は日本に来て(小豆の) あんこが好きになりました」とフィンランドからのKoykkaさんが告白する場面も。

外池ホスピタリティー委員長の実直で心のこもったガイドには頭が下がりますが、一子夫人の気配りとさわやかな対応、英語の説明は大変印象的でした。グランティーだけでなく、われわれもこの場をお借りして御礼申し上げます。



事務局からのお知らせ

松島たかね (1993 Columbia U.)

2011年11月、同窓会活動による奨学金資金の受け皿である日米交流振興財団が公益法人に移行しました。それともなっ、資金集めの実行部隊であり関東地区の同窓会である「東京フルブライト・アソシエーション (TFA)」も体制の整備と、より活発な活動を目指した1年となりました。

2012年6月には、日本と米国の交流計画60周年を記念する様々な行事を開催され、これを記念して始まった募金活動は今も続いています。また、震災の影響で、昨年度は見送られた募金集めのためのチャリティ・ゴルフ大会も開催され、さらには、2008年を最後に中断していた「ガリオア・フルブライト同窓会全国理事会」も再開、今後も定期的に全国の同窓会会長にお集まりいただき全国規模での同窓会活動を目指します。

このように、2011年から2012年にかけてはTFAの歴史の上でも最も忙しい時期となりましたが、そのなかで会長が原田敬美氏から前日米交流振興財団副理事長である文野千年男氏へバトンタッチされました。60周年事業を中心にご尽力いただいた原田氏に感謝申し上げるとともに、文野氏のもと、全国のフルブライターと協力した新たな活動が始まることを会員のみならずとも期待したいと思います。同様に、各委員会の委員長・副委員長として、この大変な時期を支えていただいた皆様、新しく同窓会活動に参加された皆様にもお礼申し上げます。

●第35回世界大会

福田 学 (1984 American U.)

今年は、英国ロンドンで10月18日(日)のレセプションに始まり、日曜日までの4日間において開催されました。アメリカ人の同窓生に向けた大会で、アジアからは少数でしたが、各国の同窓生もInternational Representativeとして例年多数参加しています。大会のテーマはMinding the Gaps (and Bridging Them!)、日本語では「繋がり」であったと思います。大学の関係者のみならず、ビジネス関係の参加も多く、金曜日の朝のオープニングでは、英国財務省、Federal Reserves、ドイツ証券取引所所属のフルブライト同窓生のパネリストを迎えて世界経済、特に中国経済などが活発に討論されました。様々な分科会もありましたが、大会参加者全員参加での土曜日の晩餐会では米国だけでなく世界の繋がりを考えるとして、英国とニューヨークにおける満開の桜の写真を使った発表がされました。参加されていた同窓生には日本のファンの方々も多く、桜、ゴルフ、そして日本での滞在体験など色々な話をすることができました。是非来年以降の大会には日本のプレゼンスを高めるためにも多数参加されるようお願いいたします。

●事務局に多くお問い合わせをいただきました件についてご案内します。

◎終身会員とは何か？

▲会則より、「満55歳以上の会員については、終身会員として50,000円を年会費に代えて支払うことを認める」とあります。50,000円をお支払いいただくことにより、55歳以降の会費が免除となります。

◎現在70歳ですが、これからの終身会員登録はやはり50,000円ですか？

▲50,000円をお願いしておりますが、今後の検討課題とさせていただきます。

◎終身会員になってもニューズレターなど案内は届きますか？

▲ニューズレター他、案内も変わらずお送りいたしますが、メールアドレスがある方はお知らせいただけると幸いです。

●編集後記

パブリシティ委員長・吉田 哲 (1977 Harvard U.)

2012年のハイライトでもある天皇皇后両陛下をお迎えした60周年記念レセプションと記念シンポジウムを特集しました。原田敬美前TFA会長と早川与志子さんの実行委員長としての報告は、参加できなかった方々にも是非読んでいただきたい。過去を振り返るだけでなく、将来への指針が示されています。

総会講演の平野共余子さんの「ニッケル・オデオンからアカデミー賞まで～映画にみるアメリカ」は、映画好きなら大興奮する内容ですが、アメリカ社会を史的に分析した教養豊かなお話です。幾つかのポイントで演者の思想と信条が披歴され、「異議なし」です。

第25号からサイズを大きくしました。従来のB5サイズからA4に拡大した誌面です。読みやすいかどうか、ご意見があればお寄せください。

前パブリシティ委員長の松尾秀助氏には、企画から編集、さらに校正までほぼすべての分野で協力と助言をいただきました。副委員長の藍原寛子さんと佐原亜子さん、事務局の山口郁子さんには初めての作業経験で苦勞を共にしました。ありがとうございました。



東京フルブライト・アソシエーション
〒100-0014 東京都千代田区永田町2-14-2
山王ランドビル416

TEL: 03-3503-1841 FAX: 03-3503-0758

E-mail: fulb@fulbright.or.jp http://www.fulbright.or.jp

(HPはフルブライト・ジャパンのHPとリンクしており、日米教育委員会から米国フルブライト・アソシエーションを経由し、グローバル・フルブライト・ネットワークにアクセスが可能です。)